

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

第六十一卷

第五号



5

日本幼稚園協会

yo

トツパンのえほん

どうようえほん <全 4巻・各 50円>

童謡絵本 <全10巻・各 70円>

合本・童謡絵本 <全 2巻・各 280円>

レコード絵本 <全 8巻・各 230円
140円>



ベビーブック <全 11巻・各 50円>

愛児絵本 <全102巻・各 50円>

こども絵本 <全 30巻・各 80円>

人形絵本 <全 25巻・各100円>

マジック絵本 <全 3巻・各110円>

百科絵本 <全 12巻・各 90円>

こども百科 <全 12巻・各130円>

絵物語 <全 31巻・各150円>

お話絵本 <全 12巻・各 90円>

フレール館 発行

今まで身近にありながら案外に基礎的な研究
がなされていない絵本についての実践的研究

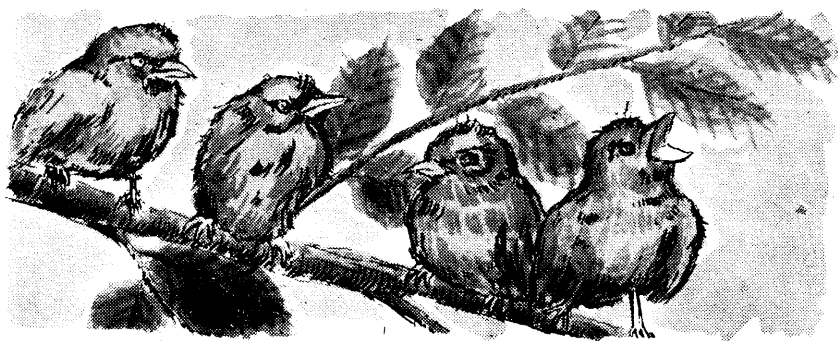
絵本の研究

幼児絵本研究会著

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----------------------------|-----------------------------|------------------------------------|-------------------------------|-------------------------------|--------------------------|------------------------------------|------------------------------------|--|---|----------------------------|--|-------------------------------|---|--|-----------------------|---|---|-----------|----------------------------|--------|
| 10. 健康
生活の
指導と
絵本 | 9. 絵
画製
作の
指導
に | 8. 絵
本
か
ら
遊
び
に | 7. 劇
遊
び
と
絵
本 | 6. こ
と
ば
の
指
導 | 5. 物
語
の
理
解 | 4. 社
会
観
察
と
絵
本 | 3. 自
然
観
察
の
指
導 | 2. 読
ん
で
聞
か
せ
る
場
合 | 1. 絵
本
を
見
る
態
度
の
指
導 | 絵
本
の
与
え
方 | 4. 絵
本
を
作
る
技
術
に
つ
い
て | 3. 題
材
に
つ
い
て | 2. こ
ど
も
の
絵
の
見
方 | 1. こ
ど
も
は
絵
本
を
ど
の
よ
う
に
見
て
い
る
か | 実
験
的
研
究 | 3. 絵
本
研
究
の
諸
問
題 | 2. 絵
本
は
こ
ど
も
に
ど
の
よ
う
に
与
え
ら
れ
て
い
る
か | 1. 序
説 | こ
ど
も
と
絵
本 | 目
次 |
|----------------------------|-----------------------------|------------------------------------|-------------------------------|-------------------------------|--------------------------|------------------------------------|------------------------------------|--|---|----------------------------|--|-------------------------------|---|--|-----------------------|---|---|-----------|----------------------------|--------|

A 5判 200 頁 360 円

フレール館



幼児の教育 目次

第六十一卷 五月号

表紙 林 義雄

- 子どもの世界……………牛島義友(2)
- 幼稚園におけるしつけ……………南 信子(6)
- 新入園児が集団生活に適應するまで
ある幼児の事例……………藤村美津(10)
- 映画「ともだち」について……………友松あきみち(18)
- こういう保育者であってはいけない
幼稚園で子どもはどのように變化するか……………三宅和夫(20)
- ささやかな喜び……………鈴木輝子(25)
- 話しながらないS君……………永井裕子(27)
- めだかずいひつ——M子のわがまま、Y子のわがまま……うすき たほ(29)
- ☆幼稚園と子どもの生活……………お茶の水女子大学附属幼稚園(34)
- ある病院小児科にて(一)……………堀 越 清(47)
- 幼児の興味持続のテスト……………尚綱女学院短期大学卒業生(52)
- 精薄児の幼児教育(一)……………青木祥子・足立寿美(54)

子どもの世界



牛 島 義 友

この頃の子どもはチャンバラの代りに二挺拳銃をあやつり、童謡を忘れてコマ・シャル・ソングを口ずさんでいる。子どもの世界はおそろしく変わったものである。

以前は子どもの世界といえば小川でさき舟を浮かべたり、わらべ歌を歌いながらまりつきをし、いろりの傍でおじいさんからかちかち山の話を探り返して聞かされていた。ここには超時代的な昔ながらの自然性があり、民族の伝統を身をもって受け継いでいた。ここでは子どもも父親も祖父母も曾祖父母も同じ生活をし、同じ共感の経験を味わっていた。この環境で育つ限り、子どもは祖先と同じような日本人となつて

いった。このように伝統文化が語り伝えられるには子ども達が忙がしい親からではなく、比較的ひまな祖父母達から育てられたということも関係しているかもしれない。昔話にでてくるのはたいがい、善いおじいさんとか、よくばりばあさんといった具合に、じいさんばあさん達であるのもこのことの反映であらう。

この状態に近代的な文化伝達法であるマス・コミが現われてから様子が変わってきた。すなわち印刷やレコードが発達してくると、昔話に代って世界おとぎ話や創作童話が生まれ、童歌の代りに童謡が歌われるようになった。この段階におけ

るマス・コミの功績は非常に大きい。子どもの知識は狭い郷土の伝説からクリムやアラビアンナイトのような、世界的空想の世界に広げられた。また多くの作家達は子どもの童心を愛し、子どものために気品のある作品を書いてくれた。赤い鳥を中心として楽しい子どもの世界がくりひろげられた。日本の児童文化史上において大正から昭和の初めほど栄えた時はなからう。

ところが今日はテレビの時代である。ラジオの普及した頃には、まだ童話・童謡はおとろえず、否ラジオを媒介として童謡は一層盛んになった。ところがテレビの時代になるや、童謡は忘れられたというよりも、テレビっ子達は童謡を聞かしてもらえず、もっぱらコマ・シャル・ソングで育てられてきた。テレビの視覚的刺激は強烈であるため、子どものいっさいの興味とエネルギーを吸い取ってしまった。テレビの普及につれ読書の傾向がへってきたといわれるが、これはおとなの世界だけでなく、子どもでも絵本や童謡の本を読むよりもテレビの方に吸われてしまう。聴覚的刺激（書物も本来聴覚的な系統のものである。）では、観念的要素が多く、非現実的な空想的な世界をかもし出すことが多く、したがって夢の世

界、童話の世界を作るのに適している。しかし視覚的刺激は、現実感が強く子どもの心の中に創作活動をひき起すよりも、対象にとらわれ、テレビの場面をただ模倣し、それに左右される傾向となる。テレビばかり見ていれば二挺拳銃で活躍したくなるのは当たり前である。今日は子ども達は強烈なテレビの力によって、ほんろうされじゅうりんされている。

この近代の技術であるテレビなどのマス・コミを非難したところでどうにもならず、ただその頑固さが笑われるだけである。しかし、この近代化現象をただそのまま認容していいよいものであろうか。

たしかに日本がこのように近代的なものを、無制限に吸収できることは、日本的な性格であり日本の強さではある。東南アジアの諸国は今、その後進性をとりもどして近代化しようとしていっている。しかし彼らのメンタリティーには外来のものを拒否する頑強な保守性がある。タイやインドの小学校を參觀すると、算数や理科には近代科学を吸収しようと努力しているが、唱歌の時間には固有の民族の音楽を教えている。タイの旋律はオルガンなどにのらないので、音楽の先生はものさしのような竹棒で机をたたいて拍子だけを取りなが

ら、口伝えに教えていた。インドではベンガルの音楽が伝統的なやり方で教えられる。ここでは鼓を手早くはじいて拍子をとるが、これはもっぱら男の樂士が受け持つ。女ばかりの女学校でも音楽の先生だけに男性が混っている。この民族固有の旋律に親しんでいる限り、西洋音階に親しむことは困難であろう。わが国が明治のはじめから、西洋音階を取り入れ、今日の日本の音楽とは決して古来の日本音楽ではなく、西欧の音楽と同一系統のものになってしまったことと較べてみたら、非常な相異である。あるいはインドでは映画が愛好され、その製作数は世界の首位を争うといわれているが、輸入映画でなく、自分達で製作する限り、この近代のマス・コミ技術も彼らの伝統的文化の伝達、普及以上に出ないであろう。

ゆえにわれわれは日本において近代技術が無制限に取り入れられ、その結果子どもの世界や人間像が著しく変形してきたからといって、なげいてはいけない。しかし近代性とは科学的合理的であるということである。しかしわれわれの今日の姿は科学的合理的といえるであろうか。コマ・シャル・ソングは誰にでも、子どもにすら分りやすいリズムとメロディ

を持って、強烈に商品を聴視者の耳に焼きつけようとして作られたものである。この点に関する限り、合理的でありまた成功している。しかしそれはあくまで商品の宣伝として合理的なのであって、子どもの心を豊かにし彼を健全に育てるために工夫され創作されたものではない。したがって子どもの教育の点からみれば、計画性のない、合理性のないものである。児童文化の世界に科学性ということばを使うのはおかしなわけであるけれど、子どもの創作性、個性を育て良い人間形成をもたらし教育の方法としては、計画性が必要となり、合理性が大切であろう。ところが今子どもに与えられている文化財には、何らの計画性がなく、完全にコマ・シャル・ソムの前に放任されているといわねばならない。このような無計画性を許して、近代的生活者と言えるであろうか。

今日の日本人は子どもの出産に関してだけはどの国よりも計画的である。昔の親達に較べれば半数以下の子ども達しか育てようとしないため、子どもを育てる精神的、時間的余裕はるかに多くなっているはずである。それなのにこのような放任が続けられている。

また今日の住宅には子どものための配慮がなされない。二

聞くらしいのアパートで、自由な子ども達の生活ができるはずがない。しかも三階・四階にいたのでは危険でしかたがない。建築の高層化を計るなら、当然子ども達の遊び場だけでなく、子ども達を安全に守る設備が計画されねばならない。香港は狭い土地に人口の密集した大都会である。七階・八階のアパートがずらりと並んでいる。このアパートの一階にはたいがい幼稚園が作られている。しかも私立の幼稚園・保育所である。彼らは自分達の手で子どもの遊び場と教育の場を解決している。

またかつては住宅の周りの路は子どもの安全な遊び場所であった。自転車で遠出をしない限り交通事故などはなかった。しかし今日ではこの静かな住宅街にも自動車が疾走し、もはや子ども達の遊びの場所となくなつた。急ぎの用をたすには高速な自動車は合理的である。しかし静かな生活を維持する（しかもこれは多忙な近代生活ではますます必要なものとなつてきている）ためには住宅街の中に自動車が侵入することとは合理的でない。学園の中には自動車の侵入が禁止されているが、われわれの住宅地にもこのような措置が必要であらう。日本人はこういう場合にすぐ金が無いという。しかし洗

濯機やテレビの普及はドイツやフランスあたりより進んでいるし、自家用車もそのうちに西欧なみに普及するかもしれない。よくいわれるように、食と衣は戦前のレベル以上になった。しかし日本の住生活はなんとみじめなことであらうか。これは日本人の金の使い方が住に対して無関心あるいはケチなためではなからうか。不当に安い家賃しか払わないので借家をたてる人がいなくなつたわけであるし、イギリスのように学校や公共施設を後まわしにしても住宅を第一にするような、私生活を尊重する伝統がないために、このような姿となるのではないだろうか。われわれは子どもを育てる世界をもっと合理的に計画していくべきではなからうか。テレビなどの高度の近代技術は用い方によればいくらでもよい教育手段となりうるものである。おもしろくてためになるというのがコマーションズのうたい文句のはずである。おもしろいけれどもためにならないものを、おもしろくてためになるものに変えさえすれば、一層高い聴視率が得られるはずである。われわれの子どものためになるように、子どもの生活環境を近代化したいものである。

× × × × ×

幼稚園におけるしつけ

南 信 子



一、しつけの伝統

「しつけ」というのは「新しく仕立てた衣服の折目をならす為に糸で粗縫にぬいつけておくこと」これが語源の意味であるといわれているが、日本におけるしつけの伝統をたどってみると、以前は種々の広い意味内容をもっていたようである。例えば一つの職業に関する技術を身につける為、丁稚奉公をする少年が、師匠・親方から叩きこまれるその職業・集団の特有のしきたり、仁義、つきあい、ふるまい振り、起居動作、行儀などを修得することをしつけと称していたし、或る地方では子どもの教育費を「しつけ銀」とよんでいたようである。しかし最近、その所属する社会や集団に適応するように、礼儀作法を身につけさせるという、かなり限定した意味に使われていることが多い。またしつけの多くは幼児期に、家庭で身につけさせる行儀作法をさしており、その方法は、語源の意味のように、外側からおしつけることにより、行動様式を習慣化・形態化しようとする傾向が強いように思

われる。しかしいずれにしてもこれを広い意味の教育の一方式と解することができると思うが、教える、育てる、指導するなどのことばと比較して考えると、しつけるといふ事は、外側からの働きかけが最も強いことが特長であり、どちらかといえば外面的で、しかも「習うよりは慣れろ」で教えるというよりも、教えこむといった他律的強制的な意味が感じられる。型にはまった行儀作法を、反復及び快不快の原理にたつて、一方的におしつけるといったしつけの考え方は、たしかに封建的であり、そのまま今日に適用されないかもしれない。しかし新しい時代にしつけが不要なものではない。むしろ今日こそ、もっとしつけの問題が真剣に考えられてよいのではないかと思う。少年の不良化、青年の犯罪など、今日の多くの問題の背後に、あやまったしつけ、或いはしつけの無力さがひそんでいるように思われてならない。それでは新しい時代のしつけは如何にあらべきか、そのあり方について考えてみたい。

二、新しい時代のしつけ

新しい時代のしつけの重要性を考えると、特に幼児期におけるしつけの必要がもっと強調されなければならないことを思う。

幼児期は人間の行動の型が形成され、生活習慣がみにつき、物と人に対する本質的な把握をなし、ものの見方、感じ方、考え方がみにつく重要な時期である。この時期にすべての子どもが、しつけによって望ましい行動様式や、生活習慣をみにつけ、新しい時代の生活の仕方を学ぶとともに、社会の一員として、その責任を意識するように成長することを助けなければならないのである。このような意味でしつけは必要である。

しつけは常にはっきりした積極的な意味をもっていなければならない。単なる両親の虚栄から「そんな事をして人から笑われますよ」といった外面的なしつけは、あやまった行動の基準を教える結果となるだけである。人間の基本的な幸福、安全、健康の為にしつけは必要なのである。

またしつけは相手が幼い子どもである為に、りくつでその意味を理解させることができない場合が多いが、それでも一方的にただ叱って矯正したり、おしつてたりするのではなく、子ども自身の成長発達の種類、性質、能力、関心度などを、愛情にみちたあたたかい気持で理解し、またすぐれた科学的な態度で理解しようとしながら指導することが大切である。そして彼らがやがて自らすすんでその意義を知って行動するように導かれることが必要である。

しつけの内容によっては形式を与えることによってその内面的な発達を助け、或るものは内面的な発達とともに自由な形式を創造することも可能であると思う。文化の型は国家により、家庭によって異なる場合も多いので形式にとらわれない自由さも必要である。

しつけを行なう人には、一貫した愛にねぎした精神が必要である。反抗期に直面している子どもを扱う時には特に深い心づかいがなければならない。感情に支配されず、子どもをおどさず、はずかしめず、不安におとしいれず、しかもわがままにせず、甘やかさず、人格を尊重しつつ祈り心をもってこれにあたることが望ましい。それと同時に、しつけられる子ども達もまた、その人々から深く愛されていることをよく感じ、知っていなければならない。

新しい時代のしつけは、広い意味の生活指導に他ならない。「しつけはまわり道」ということばがあるが、意味ぶかいことばであると思う。成長期の子どもは順応性にとんでいようであるが、彼らに望ましい行動様式を一方的に早くみにつけさせようとしても、なかなか困難である。しつけには忍耐が必要である。同じ注意を幾度も繰り返さなければならないことが多いが、常に最短距離をねらって、いらいらしてはならない。望ましい行動様式が習慣化されるにも、それは成長のリズムの中で行なわれ、準備体制がととのえられる時を待たなければならないし、行動にあらわれる外面的な結果のみを早く期待せず、内面的に成長することをまたなければならぬのである。そこで、しつけを助ける音楽や文学、絵画製作などの豊かなよい経験をさせることも非常に大切である。落ち着いた豊かな

子どもでも、おしごとになると非常に集中力を発揮することがある。よい童話の中で子ども自身が問題を治療することもある。お行儀のわるい子どもがままごとの中でよいお行儀をおぼえることもある。乱暴な子どもが小鳥を飼育することによってやさしい心を持つようになる。あせらずにままごの方法によってこのしつけの問題を考えることが必要である。きりはなされた一つひとつの行動の習慣化、形態化ではなく、その子どもの全人格、全生活の指導こそ、新しい時代のしつけでなくてはならない。

次に幼稚園における具体的なしつけの内容にふれて考えてみたい。

三、幼稚園におけるしつけ

④ 基本的習慣の形成と身のまわり事に独立する為のしつけ、を第一に以下順をおってのべる。幼児期は、清潔、食事、睡眠、排泄、着衣などに関する基本的習慣の自立する時であるから、幼稚園においてこの為のしつけを徹底させることが必要である。特にこうしたしつけは集団の中でよく習慣化されるので、よい環境をととのえ、奨励を与え、反復させながら忍耐をもつてしつけなければならない。幼稚園では歌やリズム、絵画製作などと同じように、手を洗うことや歯をみがくこと、みのまわりの整理や整頓、所有品の責任、遊びの材料の片づけ、着たりぬいだりすること、その他、排泄や食事のよい習慣がみにつく為に力をそそがねばならない。この時期についた生活習慣は一生涯

を支配することを忘れてはならないと同時に、こうした身のまわりの事に独立することは、その子どもの生活に安定感と自信を与える源となることを知らなければならない。

⑤ 通園に関するしつけ

幼稚園生活は子どもにとってはじめて独立して通園する機会である。右側交通や、信号の厳守、或る程度の行動の敏捷さ、注意深さなども徹底して訓練されることが望ましい。だんだん通園に乗物を利用することも多くなるが、順序よく乗ることや車中の礼儀などもみにつけることが大切であるし或る時間、たっていること、歩くことなどの訓練もこの時期に必要である。或る国では決して車中で子どもに席をゆずらないといわれているが、学ぶべき事である。子どもを大切にすることが甘やかすことであったり、訓練の機会を失うことであってはならない。

⑥ 遊びや仕事に関するしつけ

子どもの生活はすべて遊びであるといつてよい。遊びは或る時には仕事の要素をもっているかもしれない。いずれにせよ子どもの生命である遊びや仕事を通して、子ども達の行動の型が形成されてゆくのである。自主的に選択し、思考し、計画し、創意工夫するか、それとも依存的で無思慮、模倣的であるか、或いは遊びに没頭できるか、注意散漫であるか、活動的で積極的であるか、それとも反対に非常に消極的であるか、こうした行動の型が、この時代の遊びの中で知らず知らずのうちに形成されてゆくことを知らねばならない。性格的に弱点を勇気づけて助け、よい行動

の型が形成されるように望ましい方向づけの為に努力し、環境をととのえ指導することが大切である。

(d) 他の人々に対する態度のしつけ

幼稚園生活は子どもにとって、はじめての他の人々に接する機会であるといつてよい。他の人々に対して尊敬と信頼をもつことや、お互に愛しあわなければならないこと、よい社会を創り出す責任があることを、友達との遊びの中で教え、その態度をみにつけるように導くことに咨さかであつてはならない。自己統制力をもたないわがままな態度、暴力をふるったり、人の邪魔をしたりする反社会的な態度、反対に無口、無反応、不安、恐怖、劣等感、集団に不参加などの非社会的態度、これらは皆家庭におけるあやまつたしつけによつておこる事が多いが、幼稚園においては、これらの問題の解決の為に研究を怠つてはならないし適切な指導法の発見に心をくだかなければならない。集団生活の中で、特に先生や友達に対して尊敬と信頼をもち、絶えず明るい平和な雰囲気をつくり出す人として成長するように、社会的な態度をみにつけさせる為のしつけをあやまつてはならない。

(e) ことはのしつけ

ことはその人の人格のあらわれであるといつてよいが、幼児期は言語発達の著しい時であり、この時期に一通りの話しことはをみにつけるから、この時期にことばの指導を充分にしその人格形成に役だてなければならない。欧米では幼児期に *Play*

ase, Thank you ということばのしつけを徹底して教えるが、学ばべき点であると思う。また人の話をきくことと話すことが充分にできるようにしつけることが大切である。今日のおとなの中でも本当によい対話のできる人は少ない。一方的に勝手に話し、正確にきき答えることも少なく、その結果、本当の対話にならない場合が多い。幼児期に、ことばを通して考え、問題を解決し、自己表現をする為に、また他の人々との交りの楽しさを経験する為に、ことばのよいしつけが必要である。最後に集団訓練について考えたい。

① 集団訓練

幼稚園におけるしつけは幼稚園という集団の社会的制約性に順応させ、これに合目的な行動様式を形態化・習慣化させることをも考えなければならないが、集団生活の中で、静粛にすることや注目すること、必要な時に挙手、起立、整列をしたり、おじぎをすること、危急の場合の待避訓練などにも速やかに応ずることができるように訓練することが必要である。しかしこれらは子どもの体力や能力に深い洞察がなされて行なわれなければならないと同時に、その必要性があらかにななければならないと思う。以上、幼稚園におけるしつけのいくつかの具体的な内容にふれてきたが、これらは皆、家庭におけるしつけと一貫性をもつことが必要であることは論をまたない。また家庭と幼稚園、社会が協力して、明日の世界を創り出す子どものしつけにあたらなければならないことを痛感する。

(北陸学院保育短期大学)



新入園児が集団生活に適應するまで

—ある幼児の事例—

藤村 美津

△はじめに▽

四月の幼稚園、それは、いろいろの子どものかたまりである。集団生活などといっても意志の通じ合わない人間の集りにすぎない。

それを、みんなが、自分たちの幼稚園であることを自覚し、たのしく生活できるようにするには、どんな方法で、その集団性をつちかかっていったらいいだろうか？ 子どもひとりひとりの状態をよく知って、適切な指導をしていけたらと願いつつ、今年度の生活を記録していった。

四月八日 (土) (入園式後一週間の子どもの姿)

はじめて、幼稚園にやってきた子どもたちは、どんな方法で、集団に参加したか。

1. 親から離れて、幼稚園の遊具を相手に遊べる(一人あそびの遊具が上。一人のりブランコ、トロッコをひっぱる、スベリ台)。
2. 親から離れて、入園前に結びつきのあったともだちという。あ

そぶ時もある。

3. 親から離れて、ブラブラ歩いている(自分の所有物…下駄箱、引き出し、帽子かけなど…を点検して歩いたり、名札をいじったり、遊具によりかかったり)。

4. 親から離れて、つつ立っている(ただ立っているだけ、なにもしない)。

5. 親と一しょに遊ぶ(なんとかして、園になれさせようと親が夢中)。

6. 親から離られない(親も子どもから離れない)。

この子どもの姿をどう受けとめ、指導したか。

この時期に教師が、意図した事は「子どもが、自分の足で、床の上に立てるように」ということである。だから指導はまず、⑤、⑥の子どもに重点的に行なった。子どもと、親を離す仕事をする。

四月十二日 (水)

T 「幼稚園は、お母様がいらっしやらない方がいいんです。子どもは、自分の足で、自分で立たなければ、教育は、はじめられないんです、だから、おひきとりください」

母親 「先生に、おまかせした方がよさそうです。どうぞ、おねがいします」

T は、母親を追ってとび出していきそうな、まさあきの手を、しっかりとにぎりしめる。

M 「手ヲハナシテヨ」 「カエリタイ、カエリタイ」 「カエリ

タイヨ」 先生、ハナシテ」

T 「離れたらどうする？」

M 「カエリタインダヨ」

T 「じゃ、ひとりでかえられるの？」

M 「カエレルヨ」

T 「かえられるの？ 道おぼえた？」

M 「道？ マダ オボエテナイケドネー」

T 「それじゃ、迷い子になっちゃうじゃない」

この辺から、泣きやみはじめたMは、Tの洋服に、くっつききり、それでも鼻をすすり、すすり、ともだちの遊ぶ姿を眺められるようになってきた。スベリ台も一回すべった。

四月十三日 (木)

次の日、Mの母親は「どうぞ、おねがいます」と気持ちよくMを

「手ヲハナシテヨ」
「カエリタイカエリタイ」
「カエリタイヨ、先生、ハナシテヨ」

→



←

あんなに離して、ハナレテと泣いていたまさあき君も、一時間もすると私が他の子の世話をしている間泣きやんでそばにくっついてくる。

おいていってくれた。Mは、またも、Tの洋服にしがみついたが、今日はもう泣かない。ただ、どこに行くにもついて歩く。

今度はOの番だ。この子はMとちがって、母親を追ってとび出す勇気も、無鉄砲さもなさそうなので、あまり手をかけない。はじめ、泣いたり、わめいたり、じだんだふんだり、ひっくりかえったりしていたが、二十分もすると泣きやんで、つつ立っている。次の行動になかなか移れない。足をちよっと動かすのも、手をちよっと動かすのも、気にしている様子が、よくわかる。

——この日の午後、Oは五年生になる姉と一しょに、幼稚園に遊びにきた。家中がOのために力を合わせている。

姉「先生、チョットキテクダサイ、Oガ先生トオ話シタイツテ」

とFアの外で声をかける。Tが出ていくと、Oははずかしそうに逃げようとしたが、姉がそのともだちと二人でOをおさえ、

「先生、オ部屋デ少シ遊ンデイデスカ」という。少しの間部屋でピアノを弾いたり、本を読んだりしてあそんでいた。——

四月十四日 (金)

Oが、はじめて、絵をかく。

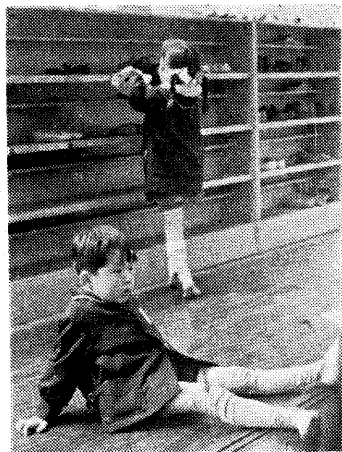
O「ボクモ絵カク」

T「じゃ、クレヨン持ってこなくちゃ」

O「先生ココニイテネ」

——といって、たいへん、ぐずぐずかきはじめる。

わめいたり、じだんだふんだりしているが、よくみると泣いていない。



いつもこうしてくっついてるんです。でも視線はともだちにいらっています。



「やっぱり泣きますでしようね」とおかあさん



Mは、相変らず、洋服にくつついて、Tのいくところは、どこにでも、ついて歩く。Oが絵をかく間も、一しよにそばに座り、そこに集ってきた五、六人の子どもたちと、結構、たのしそうにふざけている。

——この時期は、まだ会話は無い。ただ「クチュクチュクチュ」と手をあこの下やわきの下に入れ、くすぐりっこをして、ふざけ合っている——

四月十五日（土）

O、母親から離れる時だけ、ちょっとぐずったがあとは、ひとりで、グルグル部屋の中を歩きまわったり、立ちどまって、ともだちの遊びを笑いながらみている。自分も遊びたい様子が、全身にみながっているが、決断がつかない。

M、はほとんど、ともだちの中に入れたようだ、といっても、Tが一しよでなければだめなのだ。常にTを気にして、洋服にくつついている。時々、きつくすそをひっぱるので、まだまだ、自立までは時間がかかりそうだ、母親から離れたように、Tからも早く離れた方がいい。すつきりと、Mがひとり立ちできるように、チャンスをつくるう。

四月十七日（月）

O、ひとりで、ブラブラ歩きまわっている。今日は、部屋から出て、底の方までかけていった。「帰りのうた」を途中から口ずさ

んでいた。

M、朝 幼稚園にやってくるなり「今日モ先生ニクツツイテイヨ」という。Tの早く離したいというあせりを感じとられたかと、ギクリとする。

この頃、級のみんなは、ジャンケンあそび、リトミックを足がかりとして、自立とともに、となりにいるともだちを意識しはじめた。級を二組に分け、平均台の上でのジャンケンである。ジャンケンの勝負だけが目的でない。不安定な台の上で、ともだちどうしが支え合う。もちろん、意識の外での支え合いであるが、自分の前にいる人、後にいる人と、つかまったり、つかまえられたり、で知り合えたらと。

四月十八日（火）

T「ねえ、みんな！ 先生の所に、いつも、いつも、くつついてる人、いるでしょ」

「イル、イル」

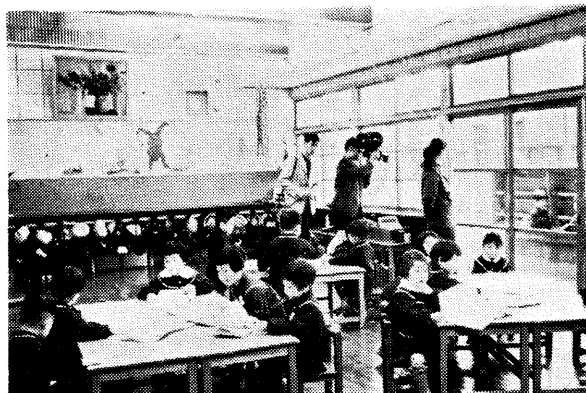
「コンドウ、マサアキ君」

「ねえ、この人、いつも、先生にくつついてはかりいて、いいかしら、みんな座っているのに、一人だけ、先生の所において、いいかしら」 「タメ」 「タメダケトサ、泣キ虫ナノ」 「ウチニ、カエリタインダロ」

「じゃ、みんなは、うちに帰りたくないの」

みんながお弁当の用意をはじめても、まだ絵がかきおわりません。クレヨンも紙も全部かかえこんで「ほら、紙がぐちゃぐちゃになっちゃうわ」

→



←

みんなが製作をはじめたときそっとぬけ出して、下駄箱へ——
はじめてともだち関係が生まれた。

「カエリタイ」

「じゃ、どうして、まさあき君みたいに泣いたり、くっついたりしないの？」

「ガマンシテンノ」

「がまんできるの？」 「デキル、デキル」 「まさあき君はど

う？」 「デキルケドサ」

口では「デキルケドサ」といったが、離れる様子はない。

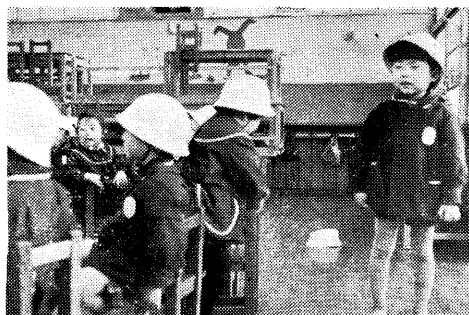
「今日ーダケ、許シテヤル」 「アシタハ、ダメダゾ」 「ソウ、今

日ーダケ イイ」

T 「まさあき君、今日だけ、先生の所にいていいって、みんながいつてるけど、あしたはだめだってよ、だいじょうぶ？」 まさあき、ニヤニヤしている。帰り道、今日の話し合いの様子を母親に話し、もし明日Mが休みたいといっても、できるだけ、つれてきてほしいと伝えた。

四月十九日 (水)

今日は 朝から、元気な仲間につかまった。「先生、ジャングルオニ、しよう」という。そこで、Mが、例の如くすそにくっついていたが、思い切つてとび出した。Mも、先生、先生と、くっついてくる。ジャングルを昇ったり、降りたり、庭をかけめぐり、スベリ台をすべり、またジャングルにもどる、など動きのはげしいあそびがはじまった。Tが、あまり早く走るので、Mの手も、Tのすそか



↓ 「ホラノ アケテヤルヨノ」
「ハヤクタブロヨノ」



不安そうな指の動き、足の位置、
でもひとりで立ったのです。



← ぐるぐるともだちのまわ
りをまわりはじめた。



ら離れがち、そのうち、追いつかなくなったMは「先生、ボク、ツ
カレチャッタ、部屋ニイッテ、休ンデル」という。「しめた」これ
が、その時のTのいつわらざる気持である。

遊びのあい間に、部屋をのぞいてみると、いつも部屋で、粘土を
しているYと、なにやら、話をしながら、椅子に座っている。Mも
これで、もう大丈夫だ。ともだちが、できたのだ。この日、洋服の
すそが、ばかに軽い。

四月二十五日 (火)

級のみんなは、大分、集団行動ができるようになってきた。今日
は朝から風が強いので、部屋で、ちぎり紙をしてあそぶ。ところ
が、みんな、しようという段になると、Oが、それに参加しない。
ところが、今日は、ひとりではない。Hと二人で、下駄箱のところ
で、何か話をしている。呼ぼうか呼ぶまいかまよった。けれど、今
のOの状態からすれば、集団に形式的に入ることより、そして、上
手にしごとをするより、Hとのともだち関係を育てる事の方が、先
決だと考え、その場は、そのままにした。二人は、しばらく、下駄
箱で、自分の場所を教え合ったり、靴をとったりしていたが、やが
て、庭に出て行き、ジャングルにのぼってあそびはじめた。

五月八日 (月)

この一週間、Oは、ほとんど、生活の流れから、はみ出ること
は、なくなった。そしてみんなのあそびの外側を、ぐるぐるまわっ

たり、粘土あそびに余念のないYと結びついたり、砂場にいったり、庭にでて木の皮をむいたり、いろいろの行動ができるようになった。そこで、今日からお弁当　また新しい関所にきたわけだ。

「ミセテアゲル」「ボクノモ、見セテアゲヨウカ」「アテタラエライ、アテタラエライ」

「サンドウィッチ、チーズタモン」

「当テタラ、ミセテアゲル」

「梅干?」「タマゴ?」「タマゴテシター」

「ボク、梅干大好キナンダ」「コチラハ、サンドウィッチデゴザイ」「オムチュビオムチュビ」

「オ塩、カケテナインタロ、ヤルヨ、コノ塩」

「コノ塩、スッバインダゾ」

こんな楽しい雰囲気の中で、Oは顔をしかめ、足をガタガタさせて、お弁当を開こうともしない。

「タベナイノカ?　食ベンノ?」

「タベナイト、タヘチャウゾ」

こうなると、まわりのともだちがほっておかない。「ハヤク、アケナヨ」　そこで、Tも手伝って、お弁当を開く。ところが、なかなかフタを開けない。お弁当箱の中から、パンを少しずつとり出しては、こそこそと食べている。なに不自由ない恵まれた家庭に育っていて、こんなにも、とぎされた心をもつなんて、なんと、さびし

いことだろう。

五月十九日　(金)

O、はじめて、みんなの前で返事をした。

T「オカダマサハル君」「ハイ」

T「オカダ　マサハル君、立派な返事ができましたね」

そのうれしそうな顔、やっぱり、うれしい時には、ニッコリ笑えるような子がいいな。

△おわりに▽

こんなふうにして、OとMは、幼稚園の集団生活に入ってしまったのです。親から離れられないという同じような子どもの中にも、その姿をおってみると、はっきりとちがうその子のもつ個性が、あるように思う。ただ、同じことは、親が、手をかけすぎていた、親のからの中に、とじこめられていたという事だけです。

このMやOのような子は、とかく、問題児扱いにされ、教師もその処理に悩むことが多いと思いますが、あくまでも、子どもたちの中に、その問題をなげかけ、生活を通して考えたり、行動したりしていく時、その子のもつよさが、見だされていくと思います。子どもの生活、それは、あそびそのもののなのです。



(東京・平塚幼稚園)

「僕モ、トモダチがデキタ」
「足ヲ、コウ、カケテ、クル
ントマワルンダヨ」



「僕コノ頃イツモニコニコ顔
モウ泣キマセンヨー」

教育映画「友だち」をみて、たいへんよい映画だと思いました。子どもの気持ちカメラを通してよくとらえられていますし、幼稚園はこういうふうにして子どもを社会生活の中にひきいれてゆくのだということがよく示されています。幼稚園を題材にしてつくられたはじめての教育映画の試みがどんなものになったか少し不安を感じながらみにいったのですが、これはよくできていたと思います。幼稚園関係者に広くみていただきたい映画です。

こまかくいうと、一部の幼稚園関係の方から批判をうけるのじゃないかと察せられる点もあります。いすや机をくみ合わせて、何かをつくってあそぶところがありました。几帳面な先生からは叱られるでしょう。しかしそういうふうにしなければできない幼児の遊びを思いきってとり上げているからよい映画といえるのだと思います。ねんどべらをふり上げているところなども、安全教育云々と言ったらむづかしい議論になりかねません。けれども、それをやっており、やらせているから、よい指導になっているのだと思います。幼稚園では何をやるのかという啓蒙映画としての役割を果たしています。

ここに掲げられた写真は、この映画から転載されたものです。この映画の中に登場する一人の子どもの入園以来の変化を記録とともに追ったものです。

(津守 真)

映画「ともだち」



について

友松あきみち

全国各地の幼稚園に関する新聞報道記事が日私幼の事務局にはこく明に集められている。秋には研究集会などに関することが多く、年末から新春にかけては入園についての記事が多い。特に入園期の新聞報道には私幼同志の競合を皮肉くる記事が散見される。大新聞でさえ地方末端にいけばいわるなべかま競争なのだが、幼稚園は教育問題としてとりあげられるだけに、いつも私幼が保育界の低調さを代表して皮肉られるのだろう。今度日私幼でつくった教育映画「ともだち」もその意味では、はじめジャーナリズムにPR臭の濃い母親向映画と思われていたようだ。

たしかに数ある私幼の中には問題をもつ園があるではあろうが、最近のように組織がかたまってくると、衆は賢なりで団体としては教育組織としての自覚も高まり、映画一つつくる場合でも純粹に意欲的な面が強くなってきている。この映画が製作される意図には私幼教育のPRが主眼となっていたことは事実であるが、全国理事会や常任理事会ではあくまでも一般人の鑑賞にたえるものでなければならぬことが早くから申し合わされていた。一般人とは幼児を持つ家庭ばかりではなくて、国民のどの層にも幼稚園教育の意味と必要性が理解されるものでなくてはならない。同時に両親はもとより私幼の現場の先生方にも、それぞれの立場で今一度幼稚園教育についてかえりみる機会を持つてもらえるような映画でなければ製作する意味も半減するわけであった。

製作の責任は日私幼の広報委員会が受持つことになったが、松村康平、石井哲夫両氏をはじめ広い分野から有能な人々に参画していただいてかなり長い討議の時期を持っている。できればシリーズとしてつづけていきたいので、保育の中で先ずどのような面に重きを置くかが大事な最初の課題であった。委員会

の空気は全国委員会の要請もあるので、幼稚園教育の使命を再認識するという意味でも集団生活と幼児の成長ということにしばって考えようということになった。近ごろは保育誌なども社会性をのばす保育をとりあげることが流行している。そのことはとりもなおさず人間形成ということと結びつけて幼稚園教育の真の意味を考えることになって来ているのだが実際には文章で伝え得るものには限界があった。はつきり言えば、そこには生の保育がないからである。

子どもと子ども、或いは子どもと教師が毎日の生活の変化の中でどんな心のふれ合いをもつて教育をすすめていったらよいのか、このことは、たとえ一日をある園ですごしつぶさに参観し得たところで、よく納得できることではない。映画「ともだち」はその意味で現場の先生方に大きな示唆をあたえる結果になっている。一学期間といううそもいつわりもない一つ生活の場で、幼稚園教育のねらいと教師の役割りがはつきりと具体的に示されているからである。

岩波映画に製作をおまかせすることに決定し、演出が時枝女史ときまってからは、どの園でどんな角度から撮るかというこ

とがすなわちこの映画の価値を決定することでもあった。候補園としてはかなり多くの園があげられたが、平凡な園であること、それは設備の上でも園児の家庭層についても一般人はもとより全国の現場の先生方に抵抗を与えぬことが必要であった。そして結局は撮影に比較的便利な園であること、演出の時枝女史とうまの合う現場であることという二つの条件によって、東京目黒の平塚幼稚園にご苦労いただくことになったのである。映画はその点何の作意もなく、ごく自然に私立幼稚園の一つの園をとりあげたにすぎない。

やがてこの映画は海外版も作製されて、日本の幼稚園教育の一面を外国の人々に理解していただく一助ともなるであろう。その時この映画が立派に国際的な批判にも応え得る教育的内容をそなえていることを日私幼の組織は確信している。私もこの映画をすでに何回か見なおしているが、その都度わが園の保育についても反省し、幼児の成長に対する理解が深まっていくことを感じている。どなたにも見ていただきたいこの映画が日本楽器の経済的援助と、岩波映画の献身的な協力によってできたということもこの機会に記録しておきたい。

こういう保育者であってはいけない



三宅 和夫

最近、幼児の教育について私が感じていることを何でもよいから書くようにとのことなので、一つ思い切って率直に、幼稚園、保育所で保育にあたっておられる方々に対しての勝手な注文をあれこれと並べてみたいと思う。

もういまさらそんな注文を受ける必要はない、とくに解決済みだと言われる人も多いかもしれない。もし、そうであれば、たいへんにうれしいことである。

いつぞや、ある所で園長さんから、いったい、先生、父母、施設設備の中で、どれに最も重点を置いて考えなくてはならないのだろうかというような質問をされたことをおぼえている。私はそれに対して、どれもそれぞれに重要なのであるが、特に何より先に考えなくてはならないのは、先生の問題ではないだろうかと答えた記憶している。

施設や設備を効果的に活用することができかどうかは先生の能

力にかかっている。また、父母に対して有効な働きかけをするかどうかも先生次第である。それなのに世間では優秀な施設、設備をそなえた幼稚園をとかくよい教育をしてくれる所と考えやすいが、どんな先生が保育にあたっているのかの検討はあまりやらない。また経営者の中にも、父母のことや、施設、設備のことはよく考えても、先生のことには、あまり考えない人もあるのではなからうか。すこし極端ないい方をしすぎたかもしれないが、幼児教育の発展は、先生たちにかかっていると思うので、いろいろと注文をつけてみたいのである。

以下、こういうタイプの先生では困るという例をいくつか挙げて考えてみよう。

(一) 生兵法で子どもを理解できたと思う先生

これは、ある意味では意欲的な先生で、ただなんとなく子どもたちに接しているだけでは飽き足らず、子どもたちについてなにかを知らうとはしているのである。よく私も、そういう先生のやった研究報告というものにふれることがあるが、一見、体裁よくとのっ

て見えるが、あまり価値あるものとは思われないものが多い。いなむしろ危険性があるといった方がよいものすらある。例えば、親子の関係の形式をある種の既成の質問紙検査で調べ、それと子どもたちの持つ問題行動を関係つけてすぐ因果関係として説明したり、知能検査や性格検査をやって、簡単にこの子はこういう子だと決めこんでしまったりといった類である。もちろん心理学的な診断検査の方法は、非常に進歩してきているものではあるが、たとえ専門家であっても多くの場合、そう簡単には的確な判定を下しうるものではないし、まだまだ診断の方法については、研究が重ねられなければならないのが現状である。まして先生たちが、テスト等を手軽に使用することは、つつしまなくてはならない。われわれおとなは子どもの前には謙虚でなくてはならない。子どもを理解しようということは決して容易なことではないのである。生きた子どもを教育者として理解するのは、あくまで現実の生活場面、つまり教育の過程の発展の中において可能なのであって、それを抜きにしてテストなどを安直に使ったものは断じて血の通った研究ではないということを確認しなくてはならない。日々の教育実践の中で自分たちの立てるフラン、働きかけとの関連において、子どもの行動を的確に観察し捉えていくことこそ必要なのであって、そのための方法の検討などが、もっと行なわれるべきであろう。現実には活動している生きた存在としての一人ひとりの子どもの姿を浮き彫りにするような研究——それは当然実践と結びついているものであるが——こそが大切

なのであることを、よく考えてほしいものである。

(二) ひとりよがりて研究心に欠ける先生

ある意味で前のタイプの先生と対立した型であるが、正しく子どもを理解していない点では同様である。この人たちは、子どもを研究材料として扱うということには反対であるが、その限りにおいては間違っていない。しかし子どもを理解しようと努めないという態度を持っているということは重大な欠陥である。ある程度、経験を持っている先生の間に案外こういう人が多い。自分の身についた技術と経験に自信があり、たいして努力しなくてもけっこう子どもを扱っていけるのである。こういう人は研究と実践は別のものと考えており、研究的なことにはあまり高い価値を置いていない。子どもたちを退屈させず、楽しくすごさせていけばそれで事足りりとしているふうがある。私にはそういう自信がふしぎでならない。どうして自分のやっていることが、そんなに間違いないことだと確信が持てるのだろうか。教育とは、その場その場だけが、大過なくやればよいというものではなく、いつも発達し動いてゆくものとしての子どもを考えなくてはならないはずである。こういう人に限って、あまり他の人のやり方に学ぼうとしたりすることを好まない。時には、人のやり方をよく見て、比較して考える必要がないだろうか。そして自分の保育した子どもになにか共通に見られるよい点、わるい点がないかどうかと考えてみるべきである。たえず自分を批判的に眺め、疑問を抱いてそれを解決しようとつとめない独善的な

態度は教育者として最も好ましくないものではないだろうか。

(三) 科学性に欠ける先生

最近の科学技術の進歩は目ざましい。私たちおとなが子どもであったころとはすべてがすっかり変わってきている。子どもたちの遊びや会話の中にもそうしたことの反映が、しばしば見られる。一方、幼児の科学性ということも、何回か、全国的な研究会などで取り上げられてきている。ところで先生たちの中には、この方面に弱い人たちがかなりいるのではないだろうか。一般に女性は、科学に弱いといわれているが、たしかにそれを認めないわけにはいかないような事実もよくみられる。もちろん幼児にむずかしい科学的知識を教えることは不必要であろう。しかし子どもたちは、しばしば科学的な事象に興味を示し、子どもなりに疑問を抱く。そういう態度は大切に育ててやらなくてはならない。そしてそのためには子どもたちに接するおとなたちがやはり科学的関心や興味を持つ人でなくてはならない。自然の観察をさせる場合でも、先生自身がそのことに興味を抱いているといわないでは、子どもたちに与える影響はたいへんにちがってくるであろう。

このことと関連して私がよく気になることは、先生たちが機械の使用をおっくうがるということである。今日たいていの幼稚園保育所には、幻燈機やテープレコーダーが備えつけられているし、さらに映写機や撮影機などを持っている所も少なくないようである。ところが、こうした道具を自在に使いこなせる先生というところ多く

はないのではなからうか。気軽に、こういう道具を用いて子どもを指導したり、また観察させる必要のある事物を撮影したり録音したりする技術は、これからの先生としてはぜひとも身につけなくてはなるまい。先生がひとりでなにかも子どもに与えようと力んでも限りがあるのであり、こうした道具を有効に駆使することによって、はるかにゆたかな経験を子どもたちに与えることができるのではないだろうか。

(四) 自主性に欠ける先生

先生たちだけでなく、私たち日本人の共通の特長として挙げられるのは、権威というものに弱く、無批判で自主性のないことである。アメリカでこれこれのやり方がなされているといえば、すぐそれをまねてみるなどということが戦後よく見られたが、考えてみれば、われわれをとりまく環境は、まるでアメリカとはちがうのだから、しっくりするわけがない。同じようにひと口に子どもといっても、東京の子どもと北海道の子ども、さらに札幌の子どもと根釧原野の子どもでは、育っている環境も彼らの発達の姿もたいへんにちがっている。だから東京の優秀な施設、設備を誇る幼稚園での保育のやり方が、別のところにそのままではまるものではない。にもかかわらず、とかく表面だけを模倣するということがありがちである。もちろん立派な保育がなされている幼稚園・保育所を見学したり、模範的カリキュラムを検討してみることが大切なことであるが、それよりも重要なのは、自分が保育しようとする子どもたちの生活環

境や発達の特質をよくしらべることである。また自分の活用できる施設や設備の状況を検討してみることも必要である。近くに広々とした野外保育に適する場所があるにもかかわらず、そのような場所にめぐまれず、室内保育に重点を置いているところのまねをして、狭い室内で多くの時間をすごさせるならいへんなあやまちを犯していることになる。もう一度、自分のまわりをよく見て考えてみる必要がある。遊具や玩具が足りないような場合、なんとかして不十分な財政から新しいものを購入する費用を捻出しようとする。せっかくのお金で買うのに、ただ他所の幼稚園や保育所のまねをして、無計画に購入したり、カタログの中から適当に選んだりというようなことはないだろうか。なにを買うかの決定をする前に、自分たちのところの子どもの遊びの状況をよく検討してみることなどがなされなくてはなるまい。

(五) 社会性に欠ける先生

子どもの社会的な適応をうながしてやり、子どもの社会性を云々することは、保育の中でも特に大切なねらいであるが、先生たち自身この点においてどうかを反省しなくてはならない。世の中にあるさまざまな矛盾や悪は、何らかの形で、子どもたちの行動に反映している。子どもたちの中にある問題を解決するためには、井の中の蛙であってはいけないので、もっと目を大きく開けて社会の中にある問題についても考えてみなくてはならない。そんなことは自分たちには無縁なことで、日々にかわいい子どもたちと楽しく過

してゆけばよいのだというような態度では決して子どもたちの持つ問題を解決してやることはできないだろう。このごろは先生たちが集って話し合ったり、発表し合ったりすることが多くなってきた。

以前にくらべれば、相当な進歩だと思う。しかしまだ、それは一部の人だけで、多くの人は、会には出ても、何を考えているのか、どんな悩みを抱えているのかさっぱりわからないようなおしどまつた状態に止まっている。どんなつまらないと思うことでも、勇気を出してしゃべってみることが必要ではないだろうか。またおたがいに率直に自分のやり方を発表し合ったり、見学しあったりして、批判し検討し合ってゆくことがもっと行なわれてよい。研究発表とか公開保育というものは、往々にして訪問着でかしこまって応接間にいるようでよそゆきのことが多い。もっとふだん着のまま、茶の間で語り合うような機会を持ち合えたら実のあるものになるのではないか。どんなに少人数でも、こうして手をつなぎ合ってやってゆけるならば、ひとりではどうてい考え及ばなかったような知恵も出る。また困難にもくじけない勇気がわいてくるのではないだろうか。

以上、思いつくままに、いくつか先生方に対する希望を述べてみた。もうそんなことはないと言われる方が多ければ幸いである。先生方がますます努力され、ほんとうに子どもたちにとって良い保育がなされ、いっそうの成果の上がることを期待しながら筆をおくことにしよう。

*

*

(北海道大学)

幼稚園で子どもはどのように変化するか

ケースの分析——保育効果に関する考察 ①

津 守 真

ここに報告されている事例は発音器官に障害をもつたためにはなすことの困難な子どもである。このような種類の子どもの発音を完全になおすことは困難である。けれども、それにもかかわらず、幼稚園はこのような子どもにプラスにはたらく。それは社会性全般についても言えるし、ことばの面についてもいえる。ことばの指導の第一段階はことばの矯正ではなくて、声を出させることである。周囲に人のいるところで声を出して恥ずかしい思いをすることのないように指導することである。この記録でも、幼稚園にきてはじめてのうちはききとれないような小声でしかはなさない。声を出すようになってからも発音がわるいので、他の子どもたちは「英語をしゃべるのか」とふしぎそうにしている。そして姉が通訳をするような形になっている。おそらく一学期のこの段階には、自分から声を出すことは多くなかったに違いない。この子どもの指導の第二段階は手術後の期間である。このような手術をしただけでは言語能力は向上しないのはふつうと考えてよいと思う。この期間の指導の第一は先生との間のコミュニケーションをつけて、距離を近づけることからはじまっている。先生は子どもを理解しようとし、しかもききかえすことをしなかった。子どもは先生との間で自分が理解されていること

を感じ、先生との間では自由に声を出すことができるようになっていく。先生がそのような態度でこの子に接していると、他の子どもたちも先生と同じにふるまうようになる。そして妙なことばをふしぎがるだけでなく、理解しようとし、また理解できるようになっていく。このような周囲の状況がこの子どもの言語活動を向上させるのに役立っていることは明らかである。そしてこれは幼稚園のような集団生活の場でなければ与えられないことである。もしもこの子どもが家庭にだけいたとしたら、家庭の中では自由に声を出せ、両親や姉には理解してもらえたらうが、一歩家を出たら、だまりこんでしまうに違いない。家から外に出たとき、そこで苦い経験を積むならば、生活全体がもっと萎縮してしまうだろう。幼稚園で適切な指導をすることによって始めて、このような子どもの社会生活が備えられる。この記録ではりっぱに言語指導をし、（それはきわ立って言語指導のようにはみえないかもしれないが）保育効果をおさめていると思う。（このような特殊な例については、幼稚園外の専門的指導をも必要とすることはもちろんである。このような子どもの言語治療については、本誌五十九巻1号——7号を参照されると便利である。）

ささやかな喜び

鈴木輝子

卒園を迎える季節になり、あらためて一年間を振り返ってみると子ども達のなんと成長したことだろうとしみじみ感じさせられる。わけても宏ちゃんが元気に遊びまわっている姿は私の喜びの一つである。この宏ちゃんには、三人の姉があり、一番下の姉である直子ちゃんと昨年四月入園した。はじめ、二人の姉弟を送ってお母様が幼稚園にいらしたが、宏ちゃんはお母様から離れない。しまいには泣きじゃくる。結局お母様はあきらめて姉だけを残して帰る。そんな状態が一週間ばかり続いた。それでお母様と話し合った結果、この子には無理なのではないか、ということ、しばらく休園することにした。時折直子ちゃんは弟の宏ちゃんが、あした、幼稚園に来るって言うてたよ。またお母様も、お姉ちゃん達が学校や幼稚園に行つてしましますと、とても淋しがって、幼稚園のことを話すんです

よ」ということであつた。

あるとき、宏ちゃんのおうちの家庭訪問をした。はじめ、かくれて出てこなかった宏ちゃんだったが、一步一步近づいて来て、目を輝かせはしゃいでいる。しかし、私共はここで思いがけないことを聞かされたのである。それは、口を開くと喉のところにさがつて見える喉彦がないため、食物が時々鼻から出てきたり、またそればかりでなくことばがはつきりしないというのである。宏ちゃんの泣声は聞けても、話すことばは聞けなかった私共は、非常に驚いた。九月には上京して、手術を受けるというので、それまで休園し、無理のない程度に、来たい時、幼稚園によこすようにいつて宏ちゃんの家をあとにした。

四、五月と過ぎ、六月になって子ども達の遊びも活発さをましてきたころ、直子ちゃんから、宏が幼稚園に来たいんだって、私と同じ部屋ならいいといってるよ」と聞かされて、他の子ども達に対しての不安もあつたけれど、承諾した。他の子ども達には前もって、みんなは宏ちゃんをおぼえているでしょう。その宏ちゃんが幼稚園にあし

たまた来るんですって、でもね、宏ちゃんは喉がスコシ悪いために、みんなのように話せないの、だけど笑つたりしないで親切にしてあげてね」と話しておいた。

翌日は子ども達と共に宏ちゃんを待たされた、直子ちゃんだけが幼稚園に現われた。な—んだ宏ちゃん来ないのか。だつて宏つたら明日にするっていうんだもの。そんなくり返しが四、五日続いた。

そんな或る日、子ども達と庭で鬼ごっこに興じていると私の背中をつつく子どもがいる。振り返ると、直子ちゃんをつれて、うれしそうに立っていた。思いがけないことなので、思わず、宏ちゃんの手をとろうとしたら、直子ちゃんの背中にかくれてしまつた。よくお母様から離れて来れたものと私は一日中腫れ物にさわる思いであつた。姉から片時も離れまいとし、また姉も弟が気にかかるのだろうか、良く世話をやく、姉一人ならもっと自由に遊べるだろうに思うと不憫になつてきた。しかし他の子ども達も姉弟に対し非常に親切であつたのでまず第一日は無事にすんだわけである。

二日目、昨日同様なんとか宏ちゃんのこ

とばを聞きたいと思つたけれど小声で姉に話すので聞きとれない。三日目、いつもそばについている直子ちゃんが弟のことを忘れたのか、または面倒になったのか姿が見えない。それに気づいた宏ちゃんは泣声で「直ちゃん」と呼んだのだろう。「アオア」に近いようなことばで大声をあげた。その声のすぐに直子ちゃんは戻ったが、子ども達は「先生 宏ちゃん英語しゃべれるの？」と驚いていた。

日一日とたつにつれ園に慣れてきたのか、かなり大きな声で姉に話すようになってきた。そのたびに子ども達はふしぎそうにしていた。例えば「僕のだよ」という場合、喉の奥から力をいれたような感じでことばを発し、「オウオアヨ」と聞こえ、子音がはつきりせず、母音だけが聞こえるような発音の仕方である。

やがて夏休みも過ぎて、九月になった。予定通り喉の手術のため上京、そして一カ月半過ぎた十月半ばに心配でたまらない私共のところへ帰って来た。

発音は明瞭になっただろうかと期待しながら宏ちゃんの話す一言一言を聞いたのだ

が、全然以前と変らない。手術さえすれば明瞭な発音ができるものと思つていたので……しかし或る日、出欠を取る時の「ハイ」とか「ナオちゃん」という短いことばが非常にきれいに聞こえるのに気がつき驚いた。

この子には今こそ集団生活という多くの刺激が大切であると思ひ、意識的にではなく自然な状態で話す機会を豊富に与えてやりたいと思つた。

今までは姉の通訳が必要だったが私もできるだけ宏ちゃんの話すことばを理解するように努めた。漠然としか理解できなくともききかえすことはやめて、すべてが理解できるようにふるまってみた。宏ちゃん自分の話すことばがすぐに理解してもらえらと思つたのだろう、自信がわいてきたのか私の隔が一步步近づくのを感じた。

クラスでの席は、はじめ宏ちゃんを真ん中に右は姉の直子ちゃん、左はいづみちゃん（直子ちゃんの一歩親しい友達、またひとりっ子のため宏ちゃんを弟のように世話する）という配置にした。そのテーブルは八人掛なので、なるべく親切にしてあげる

ように八人に話した。

十一月下旬になり、直子ちゃんが少しでも見えないものなら泣き出した宏ちゃんが姉のかわりにいづみちゃんがそばにいてくれれば泣かなくなり、またいづみちゃんの姿がなければ、テーブルの八人の誰かをみつめて、その子ども達と遊べるようになってきた。はじめ、宏ちゃんの話すことばをふしぎがっていたクラスの子ども達もよほど理解ができるようになってきた。それ以外のクラスの子ども達も理解できかねていると得意げに通訳をかけてくれる様子であった。

間もなく十二月に入って姉の直子ちゃんが「宏が勝ちゃんの隣に並びたい」とおしえてくれた。同じテーブルではあるけれど、姉のとなりから向うの勝ちゃんのそばにうつることは非常な進歩と喜んだ。

もう姉の直子ちゃんが卒園しても一人で通園できるだろう。

発音は未だ完全とはいえないが御両親の努力、そして幼稚園全体の暖かいたわりによって、よい方向へもっていきけるのではないかと思つている。

(仙 台)

ケースの分析——保育効果に関する考察 ②

この子どもの言語は前の例と違って器質的な異常をもっていない。家庭でもしゃべることが少ないし、幼稚園でも二学期の半ばまではほとんどはなさない。その後どんな文章をはなすようになっていく。おそらく家庭でも言語が向上しているだろう。この子どもの言語の向上にも幼稚園は一つの役割を果たしているとみてよいだろう。この子どもに向けられた母親の関心はこの子にとって重荷になっていたに違いない。よく面倒をみて教育的なようにみえて実際には子どもに圧力になっていて、子どもが自分の能力を出せない場合がある。この記録にみられる排泄の問題もそうだし、言語についても同様のことがいえる。そしてここで指摘されているように、圧力なしに、たのしめるふんい気の中から、自発的なことばが生れてくるのである。そのような保育と、子どもの経験が、この記録にみるような保育効果を生んでいるといえよう。

話したがらないS君

永井 裕子

入園式のすんだ後、砂場の所にいたS君に話しかけた。「ぼくの名前何ていうの?」「——」そばにいたS君のお母さんは、じれったそうにしていたが、「ほら、ぼくのな

まえ○○○○でしょ」と答えた。そしてまた「先生、家の子は口たつのが遅くてとても心配したんですよ。今でもあまりしゃべらないので困るんですが、幼稚園に入ったらいくらでもしゃべるようになるかと思っ……。どうぞよろしくお願いします」といった。無口で困ったといっているお母さん、知らず知らずのうちに無口にしてしまったのはお母さんではないだろうか。

入園式の次の日、S君は元気に登園したが一言も話さなかった。その次の日もそうだった。登園したとき私は玄関でS君のくるのを待ち、こちらから「S君おはよう」と声をかけると、うれしそうに、にこっと笑って、ただべこっと頭を下げて通っていくのだった。そして何か機会をみつけては話しかけるのだが、いつこうに口をひらこうとはしない。二カ月たったある日の朝、いつものように登園してくる子どもを玄関で迎えていると、S君も元気にやって来て「先生おはようございます」と声は低いがていねいにおじぎをして、あいさつをしたのだった。いつもはこちらから声をかけても返事をしてくれなかったのに、今日は自分からいいだしたS君、何か家でよい事があったのかなと思ひ、注意して一日を過ぎたのだがあとは、やはり何も話さなかった。でも私は、自分から「おはよう」といったS君の顔を思い出し、いつかはきっと自分からいろいろと話しかけるようになるだろうと、その時のことを想像して、あせらずゆっくり機会を待とうと思った。

S君は無口であるばかりでなく、用便に

関しても難点があった。それはこちらから「S君おしっこでしょ」といわないとお便所に行かないのである。これは家でも同様で誰かに「ほらいきなさい」と言われないと、いかないとの事であった。まずこれかなおしていかなければいけない。が、急に幼稚園ではじめても、うまくいかないと思ひ、家庭とよく話し合った。そして、いくらもじしていても自分から行動しようとしないうちは、だまっていることを約束した。またS君には「お便所にいきたくないから、ひとりでさっさといくのよ」といいきかせた。ある日、私はもじもじしているS君をみつめた。私の顔を見ては何か言いたそうにしているが、私はわざとだまっていた。まだS君はだまって前よりいっそうもじもじさせている。こんなとき「ほらS君！」と言えばすぐ便所にいくだろうとは思ったのだが。そうしているうちにS君はそそうしてしまったのだった。私はただ「S君、おしっこしたくなったら先生に言われなくてもひとりで行くのね。ズボンやパンツがぬれたら、おしりがつめたくなってしまうでしょ。こんどはちゃんとお便所

にいつてからしてちょうだいね」と言った。このことがあってから、私はS君の家を訪問し、家庭ではどの程度なされているかきいてみると、「先生、どうしてもだめね。誰かが『ほらS君』っていつてしまうんですよ。私も忙しくて……」という。お店だからたいへんだらう。でも、こんなことではいつまでたってもだめだからと、これを機会にまたあらためて約束をし、今度はきちんと守ってもらうようにした。

それからしばらくしてまた私はS君のもじもじしているのにあつた。「さあ今度はうまくいくかな？」S君は私の顔をみるなり「せんせつ」といったかと思うと、いちもくさんに便所に走っていった。私は「えらいぞS君」と心の中でうれしくなつて来た。そしてS君をほめた。それからというものS君は、いきたくなると「先生いつてきます」といつてからいくようになった。はじめは朝のあいさつもしなかった子がそして一日中何も話さなかった子が、便所にいくことをおしえるようになったことはたいへんな進歩である。夏休みが終り、たのしい運動会も終つた。子ども達みんなが

とても楽しんで参加した運動会についてのいろいろの話し合いがなされ、思い出の絵もでき上つた。この話し合いのとき、S君は「先生、ぼくおもしろかったやー」といかにうれしそうにいつた。「S君、何が一番おもしろかったの？」「あのねーつなひきおもしろかった」「それから？」「あのねー、かけっこおもしろかった」おやS君ちゃんと話せるではないか。「S君、つなひきのどんなところがおもしろかったの？」「うんとね、赤と白とひっぱつて、ぼくの赤の方が勝つたんだもん」「ああそうだったね。ぼく一生懸命ひっぱつたからでしょ」「うん、ぼくうんとひっぱつたんだ」といかにも得々とした顔である。またある時、子ども達の描いた絵を紙芝居のようにして、描いた子どもの解説も加えてお話をはじめた。子ども達は大喜び。自分の描いた絵が出てくると、得意になつて説明するのである。その説明がおもしろいといつては笑ひ、話し方がおもしろいといつては大笑いするのだつた。はやく自分の描いた絵が出てこないかなーといつた表情で待つている子ども達。S君の番にきた。ちよつと立

ち上がりがぶつたが、私の話に続いて話

しはじめた。「これは消防自動車で、今火事になった所を消しにいくところ。ゆっくりはしるとだめだから」「そうだ。はやく走らないと他の所も燃えてしまうよ」とこれはみている子ども達からの声。「火事は消えたの?」「うん、きえた」「ああよかったな」こうして絵をみながらの話し合いはどんどん進められていった。説明する子ども達にとっても反応があるから話もしやすかったのだろうし、また話したい気分になっていったのだろう。こうして少しづつでも話しはじめたS君。雪の降ったある日、S君登園するなり「先生、うちの『ねこ』死んだわ」「あらどうしてなの?」「どうしてだかわかんないけど、よるのうちにわらの中で死んでたの」と元気なさそうに話した。それからその『ねこ』のことについて少し話し合った。またある時には「先生、きのうね、ぼくチョココレートとシュークリームとケーキを食べたんだよ」「わあよかったね。そんなに食べてお腹大丈夫だったの?」「うん、大丈夫だったよ」と、きわめて簡単な会話ではあるが、話してくれ

るまでになった。

こうして考えてみると、生れつき無口という子は別として、普通話さない子（話したがらない子）というのは、自分から話し出そうという雰囲気の中にいないからではないだろうか。どうしても話さずにおれないような雰囲気は私共がつくってやらないからではないだろうか、と反省させられた。と同時に家庭にあつては、子どもが話すべきことまでも親が話してしまわないように気をつけ、少しずつでも子どもの独立心を養っていくようにしていいたらよいと思う。

(仙台)

めだかずいひつ

M子のわがまま、

Y子のわがまま

うすき たほ

帰る仕度をして腰かけている子ども達と当番の引きつきをしている時である。ランドセルを背負ったまま窓からのぞいていた

M子が、「先生」と呼びかけた。子ども達がその声に気をとられたので早速部屋に連れて座席を与えた。そして黒板にM子の名前を書かせて紹介したり、一年生の本を読んでもらったりした。M子は先輩顔で、皆の視線を浴びながら模範的態度でのぞんでいる。子ども達の間からは「上手ね」とつぶやきもれる。

このM子は、年少組から二年間、殊に年少組の時の私のメモノートに一番たくさん問題行動を記録された当事者なのである。お弁当はいつも残す。忘れものはあたりまえ。入園当初は気に入らぬことがあると黙って帰ってしまい、友達との遊びは全然できな。すぐ、かっとなって友達をつねったり、打ったりするかと思うと、集りの時はぐずぐずして一番遅い。遠足の時男の子と手をつなぐ事は絶対にいやといって困らせる。また人の遊んでいる物を平気で取り上げ、ジャンケンで負けてもゆづらない。がまんするということもできなかった。とにかく大げさにいえば、わがままの権化のようであった。

M子の家庭は、若い男の使用人が多く、

ケースの分析——保育効果に関する考察③

この記録にある二例も、幼稚園生活を通して行動の向上した例である。問題は社会的な行動である。自分の思うことを極度に主張し、そのために社会的適応を欠いている。しかしその原因はまったく異っている。一例は常に自分の思うことが通るために生じた自己主張であり、他の一例は、自分の思うことが通らないために生じた自己主張である。どちらも自己主張であるが、その発生原因に応じて、それにながうような指導をしなければ、保育効果をあげることはできない。この記録はよくそれをつかいわけて指導をしている。この記録にみるように常に周囲のおとながわがままを通している場合には、集団生活による規制が必要である。親や先生の権威ではきかない場合も、子ども同志の批判を無視することはできない。この方法で、指導したのが前者である。後者の場合は、母親から理解されない気持が子どもをいじにさせ、意地っぱりにさせているので、それにはむしろ子どもの気持を理解して扱うことが必要である。ここでは家庭訪問を通して、親にもはたらきかけて、それを行なっている。

幼稚園の保育効果というのは、子どもがただ幼稚園にくるからあがるというのではなくて、子どもに適切にはたらきかけるから、効果も上るのである。個々の子どもにとっても、全体の子どもたちにとっても、ここの記録にみるようにどのようなはたらきかけが適切であるかを工夫してゆくことによって、保育効果をあげてゆくことができるのである。

父母は仕事に忙しい。年のずっと離れた姉 環境である。おとなの中で思う存分わがま
が一人で同年輩の友達と遊ぶことも少ない まを通してきたM子ががまんすること、ま

た皆できめたことは守るなどということ
身につける機会は今までなかったの
る。そして強情な性格も手伝って、初めての
集団生活の中で大いにわがままを發揮した
わけだ。しかしM子はおとなばかりの中で
育っているので話す内容もまかせていて、こ
ちらの話も大體理解して聞けた。それで毎
日問題が起るたびに、その場で皆と一しょ
に話し合ったり、一対一でゆっくり考えた
りした。時には友達の方がM子の理屈に合
わぬわがままにあきらめて、ゆずることも
あったがそのような時は友達ががまんして
ゆずっていることをM子に理解させた。ま
た席をきめる時M子の両隣りは殊に被害が
大きいので社会性のある元気な子ども達を
配して、彼女のわがままがまわりの者に通
用しないように気をつけた。一方気が向く
と片づけや人の世話をせよとするとところ
があるM子を見込んで、仕事を頼んだり、当
番の手伝いをさせたりして、その仕事を皆
の前で認めてやった。そのようにしている
うちに今まで一日に何回となく起っていた
M子の問題行動が少しずつへってきた。年
長組になる頃にはさすがのわがままも殆ん

ど目立たなくなり、時々あのM子が思うようなことをするようになった。帽子が床に落ちているのを拾ってきたので見ると彼女のである。前から帽子の裏にゴムなどで掛けるところをつけてくるように話してあるのにも思いながら見るとゴム紐のかわりに細くさいいた布切れを糸でゆるゆるに縫いつけてある。これは子どもの仕事だと思つて本人を呼んで聞くと、家の人に何度頼んでも縫いつけてくれなかったので自分でしたという。私は約束を守るためにこんなにまで努力するようになったM子の成長がうれしかった。また園だけでは遊び足らず、いつ相談がまとまったのか弁当のいらぬ日には四、五人の友達と弁当をもって再び現われて、すべり台の下などで楽しそうに会食することもあった。時にする喧嘩も筋が通つてきて、手を出すよりことばで解決させるようになり、卒園して今は、こうして折を見ては幼稚園に立ちよってゆくのである。

父の日に黒い機関士の服を着た父の絵を描いていたY子は、一年保育児で両親のほかに妹ひとりの四人暮らしである。入園当初

は目立たなかったが、だんだん遅くなるようになった。時には母に引きずられて泣顔で部屋に入ってくる。母の話によると朝から一文句いつてからでないと家を出ようとならないのだそうだ。「友達が先に行ったから行かない」とか、「友達と喧嘩したから行かない」といったり、家でもわがままで、妹をいじめて困ると心配顔である。園では家の近所の友達とブランコに、ままごとにとよく遊ぶが表情の明るい方ではなかった。ある朝、例の如く母に引きずられてくるY子と逢い、私が引きついで、一しょに園まで来た。みちを歩きながら、さっきからのつづきのように「お母さんは、すぐ打つから嫌いだ。妹の方が悪い時でも私をおこる」とひとり言のようにいつている。私は愛情が不足しているのではないかと思つた。そしてすぐ母の気持をそこねないよう気をつけながらY子の淋しがっていることを手紙で伝えた。その後少しはY子の気持がおちついていったようだが、母に逢つて聞くと、朝からの機嫌はよくなったが、家ではやっぱりとこぼしていた。私は、ゆつくり時間をかけて家庭訪問をした。母は

ぼつぼつY子の日常生活を話していたが、膝の上に腰かけている妹が病気がもとで赤ん坊の時からまだ歩かず、一日中手がある事をつけ加えた。母が不自由な妹の手足となつていろいろのことを世話する忙しさにとりまぎれ、手のいらぬY子にはつい淋しい思いをさせていたのである。それで母にわがままをいったり、妹をいじめたりして自分の存在を知らせていたのだ。それを母は表面の行動ばかりに気をとられてY子を叱り、結果として、いらぬさせていたようだ。親は平等にしているつもりでも幼い者にとっては、親の気持はまだ理解できない。私は時にはY子を思う存分甘えさせてくださいと頼んだ。そして彼女には不自由な体の妹をいたわるようまた姉としての自覚をもつようはげました。それから次第にY子は朗らかになってきた。しばらくして母に会うと妹を可愛いがるようになったとの事であった。今では朝から仲良しの友達と肩を組んだり、スキップしたりしながら登園してきて、家族の事をたのしそうに私に報告するようになった。

第十一回 幼稚園教育実際指導研究会

教育内容の研究——「自然」「健康」「社会」を中心として

主 催 お茶の水女子大学附属幼稚園

幼 児 教 育 研 究 会

協 賛 お茶の水女子大学

教 育 研 究 室・児 童 研 究 室
附 属 小 学 校・中 学 校・高 等 学 校

本会も会を重ねること十一回、年ごとの御厚情を深く感謝申し上げます。

現在、幼稚園教育要領の改訂も進行中ですが、本会としてはすでに「言語」「音楽リズム」「絵画製作」を中心とする研究会を終えましたので、本年は、その残りの「自然」「健康」ならびに「社会」を中心のテーマとすることにいたしました。「自然」「健康」については、すでに指導書も出ているので、相当突っこんだ論究が展開されることを期待していますが、「社会」にはまだ指導書もなく、むしろその関係分野に内在する諸問題点を見きわめて、今後の指標にしたい、と思います。

また恒例により、本園の、保育全般にわたる実際指導を公開し、同時に、本園の教育課程についての、ささやかな試案をも発表して、御批正をえたいと思っています。

本年も、多数の皆様の御参会を心からお待ち申しあげています。

なお、「幼児の教育」六月号を、本テーマに基づく特集としました。

日 時	会 場	講 師
昭和三十七年六月一（金）二（土）三（日）の三日間	お茶の水女子大学講堂	
		（健康）お茶の水女子大学教授 平 井 信 義
		（自然）お茶の水女子大学助教授 太 田 次 郎
		（社会）お茶の水女子大学助教授 津 守 真

実際指導

会 員

会 費

申込期限

申込場所

宿 泊

日 程 表

日	時	6月1日 (金)	6月2日 (土)	6月3日 (日)
	9.00	受付	実際指導ならびに 研究発表	実際指導
	9.30	開会		
	10.00	実際指導ならびに研究発表	講演 平井教授	協議 実際指導 「社会」に関して
	11.00			
	12.00	昼食	昼食	閉会のあいさつ
	13.00	協議 実際指導	協議 実際指導	
	14.00	シンポジウム 「自然」に関して	シンポジウム 「健康」に関して	
	15.00			
	16.00			

幼稚園・保育園・小学校の教育関係者及び一般希望者
三〇〇円（研究要項代を含む。当日お払い下さい）
五月二十五日までにはがきでお申込み下さい。
東京都文京区大塚町三五 お茶の水女子大学附属幼稚園 幼児教育研究会
ご希望の方は五月二十日までにお申込み下さい。二食付七〇〇円（別にサービス料一割）ぐらいにてお
世話いたします。

〔予告〕当研究会までに「本園の教育課程（仮称）」出版の予定 実費でおわかしします。

お茶の水女子大学教授 附 属 幼 稚 園 長 坂 元 彦 太 郎

お茶の水女子大学附属幼稚園職員一同

幼稚園と子どもの生活



お茶の水女子大学附属幼稚園

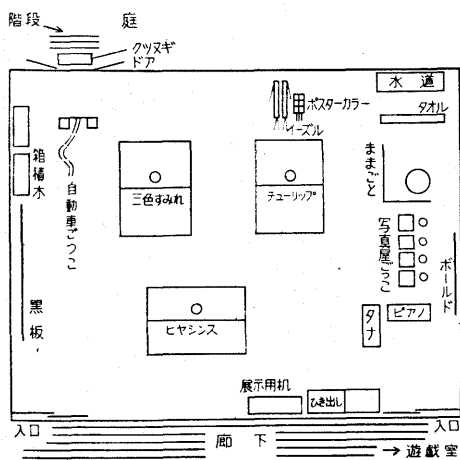
幼稚園は、どの子どもも自分のありのままの生活ができる
ところでありたいと思います。一月号には幼稚園の五才児の
一日の生活の記録を載せて好評を得ましたので、今度は四才
児の記録をのせることにしました。立体的に展開する幼稚園
の生活を、平面上に文字で記すことは困難ですが、ていねい
にやんできただけは、幼稚園の一日の生活の輪郭をみていた
だくことができると思います。またその中で先生がどのよう
に動いているかを注意してみてください。

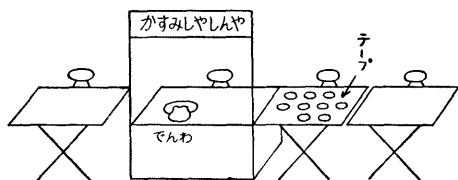
二月二日(金)

◇九・二〇△保育室▽登園したての様子

登園している子は男児五人、女児三人。先生はボールドに鬼の面
をとめている。二〜三人の子がそれを見ている。他はポスターカラ
ーで絵をかく子、クレヨンで自由画、黒板にチョークでかく子。
「かすみしゃしんや」と看板のあがっている台にA男が種々の色
の紙テープを並べ始める。

先生「カラーフィルム？ これねカラーフィルムじゃないのよ」と
先生の後へついて来るA子に笑ってみせる。
先生「B子ちゃん」とぼんやり立っている女児にほほ笑みかける。





B子笑ってひき出しをあげる。C子「B子ちゃん」と頭へ手をおく。B子自由画をかいているD子の所へ見に行く。D子は笑って手をB子の顔の方へのばす。

◇九・二五

三つのグループに机が並べてあり、各々に三色すみれ、チューリップ、水栽培のヒヤシンスが飾られている。先生自由画を描いているD子に、ヒヤシンスを指しながら、「D子ちゃん、D子ちゃん二つ咲いている。明日になったらもう一つ咲くのよ」

B子「D子ちゃん、さかだちよ」(自由画帖のこと)

D子「あら、そうお」

B子「わたし何かこうかしら……。まねしようかな」

先生「お早うございます」と登壇した子の頭へ手をおく。庭へ出られるドアをあげる。

保育室の右側ではE子・F子がままごことを始める。ままごて用の小さい丸いおせんの上へ、まないたをおいている。「おくつしたはかせよう」と二人で人形に靴下をはかせる。

しゃしんやの看板のところへC男が座ろうとすると、テーブルを並べていたB男

「ここだめ、ここ隊長の場所だよ、おいすもって来てすわれよ」と、横の場所を示す。C男はだまっていすを取りに行き、示された場所へすわる。

先生・母親と話し、高窓をあげる。

◇九・三〇

ままごと女児3、写真屋男児3、自由画女児5人。

○写真やっこ

先生「こんにちは、今二人でいますからカラーしゃしんとって下さい」とA子の手をとって写真屋の前へ行き、こしかける。

A男「ここみなさい」と看板を指さす。

先生「おわり、やすみ」と看板のところにかかれた文字をよむ。

B男「ちよつと、おやすみです」

先生「せっかく来たからとって下さい」

B男「おやすみ」

先生「じゃちよつとお使いに行つて来ますからとっておいして下さい」とA子を残して行くが、A子は教師の後をついて行く。

C男「おい、カラー写真だつて」と紙を切りながら言う。写真屋の前を通ろうとするD男に

C男「写真屋でござい」

D男「おやすみです」とよむ。E男やつて来て「おやすみ、しゃしんや、やがへんだな、みはいいけど」

D男「おわりだつてとるの」

A男「とるよ」とおやすみとかいた紙をはずす。

◇九・三五

先生「できましたか」

B男 紙を渡す。

先生「あら、二人でいたのに誰も写っていないの?」といいながらタオルの方へ行く。

B男「おい、写真屋だぞここ」と通る子に言う。F男いすを持って来てすわり、写真屋に加わる。A男でんわをもう一つ持って来て並べる。

ままごと4、自由画6、黒板にはった写真を見る子2、プラスチックの組合せをしている子4、ぶらぶらしている子2 計18人

○自由画

「わはっはっはっはっ」と笑う。先生みる。

B子「これと、これと違うの」とC子の絵と自分の絵をみせる。

先生「そうね ちよっとにているわね」

D子「B子ちゃんたちの方が上手ね」

C子「みんなの方がお上手ね。わたしこんななの」

○写真屋ごっこ

男児「テープやー、テープやー」

B男「テープやじゃない、写真屋だよ」

三人立ってみている。四人が写真屋やにすわっており、各々紙を切ったり、紙にかいたりしている。

B男「カラー？」とみている女児にきく。女児こっくりする。

B男「おいカラーだぞ、何色？」

女児「大きいのがいい」と水色のテープを指す。

B男「これ？」 女児こっくり。B男そのテープをとってA男に渡す。A男は紙を切る。

A男「カラー？ 色？ どちらですか」

B男「カラー。大き目？ 小き目」と女児に。

女児「大き目」

立って見ている二人の子に

C男「写真や、何もかいてないですけど」

先生 水色のセロファンをH男に渡す。H男写真機をつくっている。

先生写真屋へ来て「ちよっとセロテープ貸して下さい。またもって来ます。」B男は先生に紙に、色鉛筆でかいた写真を渡す。

先生「あら、二人いたから二人写っている。これおいくら？」

B男「二五〇円」

先生「あら」

◇九・四〇

先生H男の写真機の箱に穴をあけてあげる。

自由画の女児「先生、

これいいでしょう」先生、

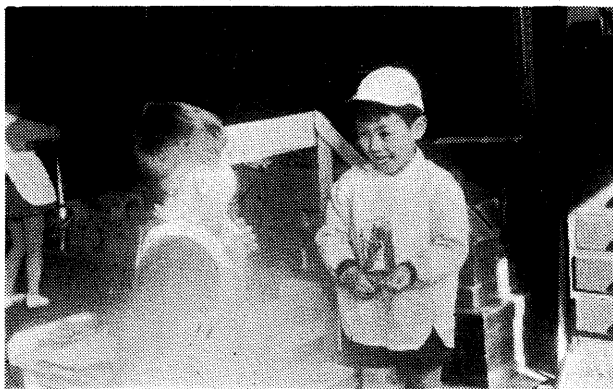
生みて笑う。鬼の面の破れたところをはる。

H男箱を持って「これでいいでしょう」先生

うなずく。先生「B子ちゃんちよっとクレヨン貸してね。B子こっ

くり。

先生は保育室でなわとびしている女児に「とべるのあなた？」と



ききながら写真屋へ行き、「カラー写真のお代と、上手に遊んでい
るごほうびに五百円差し上げます」

B男「はい」と受け取り、にっこり笑う。

A男、二、三人みに来た子に「行け、行け」といい、外の方をみな
がら「やーめた、やーめた」他の三人も「やーめた、やーめた」と
散りかけたが、大急ぎでかたづけだす。

◇九・四五

外で写真屋の子たちをいっしょうけんめい呼んでいる。

I男「お前、ワンワンドッグ忘れたらだめだぞ」

G子「だって〇ちゃんまだ来てないんですもの」

子どもの家（庭にあり、畳のへや、ちがいの棚、子ども用藤いす、ま
まごと道具、オルガンなどがある）へ写真やごっこをしていた男児
たちがとんで行く。

△子どもの家▽

J男「おい二階だぞ」とちがいの棚の上にねころぶ。

B男「おいだめだぞ。隊長がねるんだぞ」とI男をひきずりおろ
す。

C男「お医者だつてねる時あるぞ。夜になれば」といいつつ、皆で
テーブルを出したり、椅子を並べたりする。その後子どもたちは、
ぬいぐるみの人形を投げ合ったり、ワンワンといいながらとつとつみ
合ったり、ねころんだり、家庭にいるようなまとまりのないあそび
をしている。

◇九・五〇

△保育室▽

先生は鬼の面をボールドにとめている。

三人の女兒「お外へ行こう」と縄とびひもをもって外へ出る。自
由画をかいていたB子「あした節分だっけ」

先生「そう」

B子「あ、そうだ」

自由画3、ままごと2、

小自動車であそぶ4、こまをつくっている2、

子どもの家10、外8人

○乗り物ごっこ

保育室の左側で男児三人、女兒一人小さい自動車で遊んでいる。

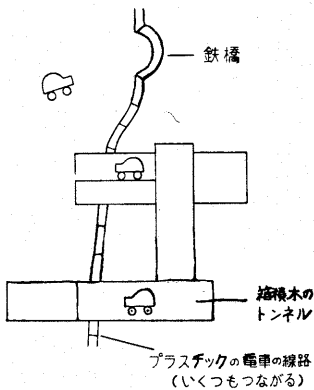
K男「ここ池袋」

L男「ここ大塚」

M男「ここ車庫」「どこへでも行けるのかいいなあ。これいいだ
ろ」

M男が積木を並べようとするとK男「だめだよ」と積木をうばい
とり、「ここ池袋だもの
なあ」と言う。K男はL男
にも自由に積木をおかせ
ない。二人とも「Kちゃ
んここへおいでいい」と
ききながらおく。

K男「あと荻窪」「ここ
道にしようか」と鉄橋を
おく。M男は自動車をあ



ちこち走らせてみる。男児三人加わる。

先生、母親と話をしている。

◇九・五五

K男「ここへ来てもいいよ」と鉄橋をおす。

L男「ここまで」ととめる。

M男「おれがそんなにいうことないよ」とふしをつけてくり返しながら行ったり来たりする。

K男「なんだ、つまらないな、せっかく……」

L男「いいよ、くらいもん」

K男「くらくてもいいじゃないか」

L男「そんなことない」

K男「ああ、いいものできたLちゃん通れるよ。おもしろいじゃないここ。下みてごらん」と箱積木の下へ線路を並べたのをのぞきこむ。L男ものぞく。

L男「電車来ないかな」

N男「箱積木の上を歩く」

K男「あれ、こわれちゃった」

L男「ふみきりにしない？」「ここ」といいながら車庫をつくる。

◇一〇・〇〇

先生母と話。

〇保育室の他の子どもの様子

写真屋の電話の前で一人バンチで穴をあけている。ままごとをしている二人、一人は人形をおぶっている。一人はその人形に靴下をはかせている。買物かごを持って「行きましょ」と出かける。

三人の女兒が画用紙で黙々としてこまをつくっている。できてまわしてみた子が先生に「まわらない」と言う。先生母親と話しながら、こまをとってみる。

一人の男児が、箱にセロファンをはって写真機をつくっている。

△庭▽

四人なわとびをしていたが、「あせびつしより」「わたしもよ」「子どものおうちあいてないかしら」「こどものおうちあいてなかったらブランコしよう」と四人走ってみに行く。「あいていない、あいていない」とブランコの方へ走って行く。

△子どもの家▽

十人の子どもがいる。

A男「罰金千円もらうよ。先生に誰かいう人手をあげて」

C男「手をあげる」。

A男「お前だめだめ。お前こわしたな」ついたての板がとれている。誰が先生にいいに行くかい合っているが、A男「やんなっちゃうな」といいつつ二三人の子と先生の所へ走って行く。

△保育室▽

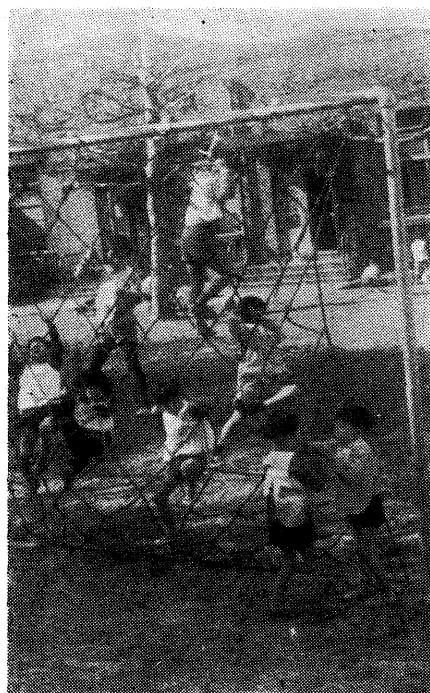
先生「ああ、あそこ、こわれているのよ」といって、再び母親と話。

◇一〇・〇五

ブランコして来た女兒「おえかきしようかな」と入って来るが、遊戯室へスキップをしながら行く。

△遊戯室▽

スカイジムへのぼる。



○「こわいからやめた」

○「ちょっとおりてごらん」

○「そこおりの簡単よ」

○「おりたことないもの」

○「そうよないけどさ、簡単よ。おりればいいでしょ」

○「わたしこれ簡単よ」

○「わたし、これでもできるわよ、これでもできるわよ」

と三人の女兒が、スカイジムからとびおりたり、板をつたわったりし合って自慢合っている。

◇一〇・一〇

△保育室▽

○片づけ

自動車ごっこが終わり、皆で片づけ始めている。

セロファンをはって写真機をつくった男児、パチ、パチといいながら、片づけている様子や、ままごとの有様を写真にとるまねをしている。

遊戯室にいた三人の女兒入って来て「おえかき」と机の前にすわる。

先生「○ちゃん お当番さんよんで」

「川の組おゆうぎ、川の組おゆうぎ」と、お当番を呼びに行った子が叫ぶ。皆、中へ入って来る。

先生、母と話。

「わたしおすわりして待っていよう」と一人の女兒席にすわる。

ままごとも片づけた。お遊戯室よ、お遊戯室よと入って来る子

五人、席にすわる。

◇一〇・一五

○一同が席につく

遊戯室へとんで行った子も皆もどってすわる。

先生「Pちゃんは、Pちゃんは、お当番さんしません」当番がPを、遊戯室へよびに行く。P男遊戯室からもどる。

先生「あとで先生といってもわからないわよ。しまわないと……。

Pちゃんここへ入れて」と箱を示す。

先生「あのね今日ずいぶんお休みね」と黒板に書いてあるお休みの名前を指す。

「七人だもの」

「八人だもの」



「七人じゃないよね、Ｙちゃんお休みだもの」といい合う。

先生「ここにお休みしている人皆お風邪なの」

○「一番上の○ちゃんお風邪じゃない」

先生「でも静岡でお風邪かもしれない」

○「そうだね」

風邪の時の注意を少し話し合う。

先生「じゃお遊戯室へね」

という子どもたちきつと、保育室の入口の所へ並ぶ。

先生「おしまいの方しめて下さい」(保育室のドアのこと)といって歩きだす。

子どもたち「発車」といながらスキップをして遊戯室の方へ行く。二三人の子ども、黒板へちょっとかいてみては歩きだす。

◇一〇・二五

△遊戯室△

先生、男女児一人ずつ選び、ピアノの前にすわる。

前へ出て来た二人の子に「よくやってあげてね」と

いい、皆に「さあ、お歌うたってあげてね」という。子どもたちは広い遊戯室のピアノの近くに横へ一列にすわっている。子どもたちはピアノに合わせて写真の歌をうたう。かわいかわいうつしてねね、にっこりにっこりわらうから……」前へ出て来た二人は歌に合わせて写真をとるまねをする。写真をとった二人は次の二人を選び、次々に選んでいく。三回くりかえす。時々写真を写し終る時「いいだ」と手を出したりする子がある。

先生「じゃ先生、飛行機しているとき写しちゃおうかな」

子どもたちきつと立って、「丸くなれ、丸くなれ」と輪をつくるが、ふざけている子が数人ある。

先生「遊園地の飛行機早く仕度しないと、子どもが乗れないわよ」

皆ピンとする。ピアノに合わせて、両手をピンと横にはって、うたいながら輪に飛ぶ。(曲が遊園地の飛行機の間は輪をくずさない)曲が変わって本物の飛行機の部分へ来ると、うれしそうに、遊戯室を縦横に飛びまわる。写真の歌の時から時々立って、ひょこひょこ歩いたり、ねころんだりしていた男児、ピアノにぶらさがる。先生が「○ちゃん、○ちゃん」というと、すぐ飛んで行く。ブルブルブルとピアノで飛行機がとまるところをひく。とまって頭を床につけている子数人、大部分手でプロペラのまわる表現をしている。ピアノに合わせてとまる。先生「Ｈちゃんのとこ、プロペラよくできていたわね。ここへまあるく……と先生が手を頭の上でまわすと男児「ヘリコプター、ヘリコプター」

先生「ここにしゃべりがついているのよ」

子どもたち二三人のグループになって肩へ手をのせてつながる。

前の子が手をまわし、後の子は前の子につかまって走る。早く走ってバラバラになったり、ころんだりしながら精一杯走りまわる。ピアノとまる。

◇一〇・三〇

先生「お休みしましょう。よく休んでいるヘリコプターはこの次よく飛べます」。子どもたち床にねころんだり、すわって両手を合わせて耳へやり、ねる表現をしたりする。二～三人走りまわる。「夢だよ夢だよ」と数人とびまわる。ピアノ静かにひく。先生「はい油が一杯になりましたからとんで下さい」

◇一〇・三五

たいへんうれしそうに飛びまわり、また休む。皆が床にねころび、次は両足をあげて立ったり、足をあげないで立ったり、ピアノに合わせて。次にピアノに合わせて自由に歩く。四拍子で、一拍目を強くひくと、子どもたちは強く歩く。

◇一〇・四〇

男児、女児別々に歩いたりする。女児が歩いている時、男児十人まるくかたまつて「アッチ、アッチ」とひばちにあたるまねをしている。男児の番になると女児がまねをする。「ひばちにあたっているような弱虫さんお山へのぼれるかしら」と先生。女児も立ちあがり、山登りの表現をする。

先生「じゃ今度はこのくらい高い山よ」と手で表現。次々に「このくらい高い山よ」「こんどはこんな高い山よ、おふとも、食べ物ももって」と言う子どもたちは高さにより違う表現をする。「帰りはスキーで帰りますよ」ふざけている子がいるので、ピアノをち

よっと中止して「のぼる時、よくのぼらないと、よくすべらないのよ」と注意、子どもたちちゃんとやり直す。

◇一〇・四五

スキーの表現、皆うれしそうにする。ただ走っている子もいる。

先生「こんどはもうスキーもぬいで、六人ずつスキップね、次々と六人、五人と出て来て広いホールを縦横にスキップする。曲がフォークダンスの曲になると、二人ずつくんでダンスをする。五人が出て来た時は、一人はんばになる。先生が「三人ですれば」というと、次からは二人、三人のグループでおどる。

◇一〇・五〇

途中で曲にあわずばらばらになる。

先生「今は飛行機じゃないのよ。だからピアノの音をよく聞いてね」子どもたちちゃんと合わせてやる。一通りすむ。

先生「今度はお外で遊ばなかったから、お外で遊びましょう。並んで。とび出さないでね」。一列に並んで外へ出る。

◇一〇・五五

△庭▽

先生、保育室でマリをつく子を「外でつかない」ときそつて外へ出る。なわとびをしている子に「〇ちゃん」とそのなわに一しょに入つてとぶ。次に先生がなわをもつてとび、子どもがそれに入る。

B子・C子・D子「先生、A男ちゃん、こどものおうちへ入れてくれないんだって」

先生「みんなできてみて」

先生「あなたお靴はく時、はだしにならないでね、この靴の上にぬ



いで」とH男に。

先生「H男ちゃんのトンネルから汽車ポッポが出て来たの知ってる」

H男「知らない。ぼくやってなかったもの」

先生「お顔のトンネルよ」

H男「お顔の」といいながら靴をはく。(鼻が二本出ている)

外でままごと2、縄とび3、大きい自動車に乗る1、そのそばに2、

ごさを敷いている子2、あとは皆子どもの家

自動車に乗っているR男に「おしたげようか」と二人の男児が自動車をおす。

◇一一・〇〇

△子どもの家▽

皆一列に並んで入口のところにすわっている。

先生「ごめん下さい」と戸をあける。

子どもたちいっせいにワンワンワンと勢よくほえる。

先生「ワッハハハ……こんな寒いところにいると病気になるわよ」ピンを高くあげながら

A男「大丈夫だよ、これがあるから」(葉の意味らしい)

先生「ちょっとこんなに大勢の中で、一匹ぐらい丈夫なワンワンはいないものですかね」

B男「はい」と手をあげる。

先生「ああ、元気なワンワン出て来た。元気なワンワンと競走しようかな」

△庭▽

○おにごっこ

皆犬の競走、犬の競走と叫びながら外へとび出す。十人の子どもたち「ワンワンワン」といいながらジャンケン、先生も共にジャンケンし木おにが始まる。先生がF男に「ワンワン」と手をたたくとF男「ぼく人間の組だもの」

先生「あなた人間」

◇一一・〇五

〇ままごと

三人ごぎを敷いてままごと。

E子「わたしおかあさんよ」

F子「わたし一番上のおねえさんだから持って来てあげるわ」と石をひろいに行く。G子だまってすわっている。

先生はおにごっこ。

◇一一・一〇

バドミントンのバットで二人の女兒まりをついている。

ままごとが二人になる。F子人形をねかせ、おせんの上へコップなどをならべている。ざぶとんの上へすわり「おいしいのつくってあげるわね」と小積木をお皿へもる。

F子「おいちご赤ちゃんにあげましょうね」

E子「バナナジュースは」人形すわらせつつ。

F子「わたしたちはバナナジュースよ」

E子「ねえ、ああいいう石とって来て」

F子「赤ちゃんどうしようか。すわらせてもころぶの」

E子「赤ちゃんわたしが食べさせるから」F子が立たないので、E子は自分でひろいに行く。

◇一一・一五

先生が歩いて来る。

E子「先生」とよぶ。

先生「ごめん下さい」とごぎの上へすわる。

E子「これミルク」。先生は飲むまねをし、バナナをむくまねをして食べる。

E子「みかんむいてあげました」

先生「あら、柿じゃない」

E子「ああ柿だ。ほうちようもって来なかったっけ」とさがし、保育室へとりに行く。

先生「ああ自家用車が来た来た(自動車にのった子が通る)。あ、魔法のおじいさん、魔法でごちそう出して下さい」(棒をもってそばを通る子に。だまって通り過ぎる)。

E子「さあ、むきますから」(ほうちようをもち、柿をくるくるまわす)。

先生「あら上手ね」

E子「はいむきました。このはっぱのどこ残さなきゃ。はい、もう一つ」

J子「今日は」

先生「いらっしゃいませ」

F子「お砂糖入れてあげましょう」

先生「お砂糖のかたまり(入れての意)」笑いながら。

F子「これ角砂糖」

先生「あ、そう」

B子・C子・D子が石段の上からみている。

先生「そっちは何屋さん」

B子「何もない。休む所」

先生「では休ませていただきます」

C子・D子 「どうぞ、
ゆっくり、ゆっくり」
先生 「どうも、ちそう
さまでした。玄関か
ら」といいながら靴を
はき、B子たちの所へ
行く。

○休む所

先生 「ごめん下さい。
お玄関どこ」

B子 「こっち、こっ
ち」保育室の石段に「こ
ざが敷いてある。先生
言われた所で靴をぬい
で階段のござの上にす
わる。

先生 「ここ、二階」

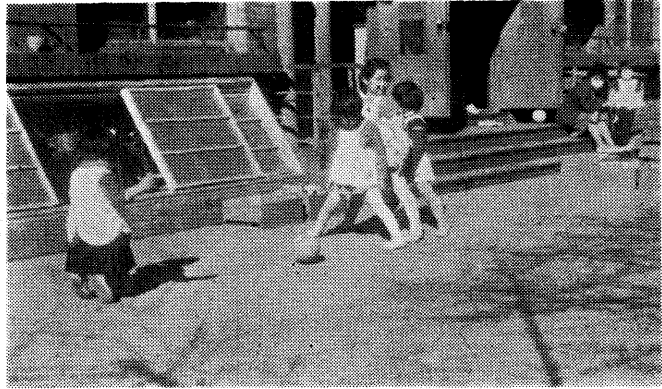
C子 「ここ、屋上」

ままごとをしていたE子、人形をだき、ごちそうをもって来る。
先生 「あ、何か持ってきて下さいましたよ」

E子 「これ、おむすびですよ」とD子に渡し、「ただいま」とF子
の所へ帰る。D子 「どうもありがとう」とE子の所へ返しに行く。

I男 「先生、ばく入れてといっても入れてくれないんだよ」

先生 「まあ、なぜでしょう」。I男行く。



ままごとの家にも、お休み所にも、各々保育室から電話を持って
来ておく。

B子が受話器を取り上げると、E子みていてすぐ受話器をもつ。

B子 「もしもし、となりのおねえさんですか」

E子 「はいはい」

B子 「あのお……きのおはどうもありがとう」

E子 「こっちこそ」

B子 「じゃ、さようなら」

E子 「さようなら」

◇一・二五

△保育室▽

先生 そつと保育室へ入り弁当の準備。

M男 「先生〇ちゃんへリコプターで鉄砲つくっているの」と入って
来る。

先生 「そうお」

△庭▽

ままごと、休む所をしている他の子は、ブランコ、おにごっこ、
なわとび、すべり台、山の上で走りまわる。

○休む所

C子 「もしもし」三人がそばで言うことを教える。

E子 「はいはい」

C子 「お客様が来たから、何か持ってきて下さい」

E子 「いや」

C子 「わたしが買いに行くわ」と立ち上がる。

B子「ここわたしの部屋よ」

D子「ここわたしよ」と階段を一段ずつ決める。

B子「時々遊びに行くのよこうやって」と階段をおりてみせ、あな
たたちはこうやってと階段をあがってみせ、「リーとベル押すの
よ」

D子「わたしやってみよう」とやってみる。リー。

C子「どうぞ」。上の段に三人すわる。

B子「わたし遊びに行つて来るわ。ここ開かないの」

D子「ひらけーごまというと開くわよ」

◇一・三五

△保育室V

二人の男児絵をかきだす。

二人の女児がのぞき「あらどうしたのでしょうか。あそこ三人」と三
ついの並んでいるのを指して言う。絵をかいていた子やめて「先
生お弁当にしているの？」。先生うなずく。「川の組お弁当とう」とふ
しをつけて叫ぶ。だんだん叫ぶ子がふえ、あちこちからとんで来る。

保育者の立場



○最近感じていたこと

最近あそびに発展性がないことを感じていました。皆がただワ

ーと集まって、別に目的もなくさわいで、ワマーと去ってしまうよ
うなのです。そしてなんとなく私の目を避けている感じなのです。

それで困ったことだなと考えている時、三才児が写真機をつくつて
遊んでいたのですが、誰かが遊戲室へ忘れて行ったのです。それ
を私のクラスの子どもがひろつて来てしばらく遊んで返してあげま
した。おもしろそうに遊んでいたの、私は、皆が写真機をつくつ
て「写真やごっこ」ができたらと思いました。それで「ぼくたちも
写真機つくつたら」とちよつとと言うと「三才の子ができたから、ぼ
くたちにできないはずないな」などと言いがらつくり始めまし
た。発展させたいという意図があったので、むつかしいところを手
伝いました。店のワクをおいて、「しゃんや」と書いておきまし
た。子どもたちはすぐ私の書いた看板を破ってしまった。「かすみし
ゃんや」などと自分たちの字で書き、その横へ「ちよつとおやす
みです」とか「おやすみ」とか書いたりし楽しく遊び始めました。
それから、やたらにダーと走りまわることが止まりました。それま
で、玄関、テレビ室、山の上、子どもの家など私の目のとどかない
所で遊んでいたのが、保育室で遊ぶことが多くなり、私のそばにい
ることが多いので、私の意図が伝わりやすく、遊びが変わってきま
した。写真屋はどんな発展し、種々な色の紙テープをカラーフィ
ルムにしたり、写真をとりに行く写真に写ったところをかくてく
れたりしました。私には何か写真屋ごつこの経験を通して、遊び全
体がおもしろく、発展性のあるものになってきたように思えます。

○このクラスの子どもの特徴

このクラスはグループがたいへん早くでき、しかも大きいので

す。おにごっこなど、ほとんど皆で一団となってやっています。グループとしてのまとまりが良く、リーダーの言うことを良く聞きます。反抗する子が少ないのです。リーダーは知能の高い子より、人気のある、常識的で、あたりの柔らかい子になっています。みなよく隊長と呼んでいます。リーダーになってもいいと思う子がならないので、調べてみると、兄弟が多くて、真ん中でもまれているので、妥協してうまくやることを知っているらしいのです。

よそのクラスの子は皆おしゃべりしながら何かをするのですが、このクラスは絵をかく時も、製作する時も、黙々としてやっています。女兒に、はでに口をきく子がいないのです。集団としては扱いよいのですが、何かつまらない気がします。

○音楽リズム

週二回遊戯室が使えます。保育室で一回か多くて二回、音楽リズムをします。音楽リズムが、絵画製作に比べて割合が大きいようです。リズム表現はことばで誘導します。動作で誘導するとまねになりますから。こう言うのもある、誰さんはこうしてた、と考える余地を与えるようにします。

○消極的な子ども

いつもひとりであまりいろいろなことを積極的に行やらない子ども、誘わなければ何もできない子どもは、私の方から誘います。スカイジムなど数少ない運動具は、勢力のない子どもは誘いかけてあげないと使えなくなってしまうです。

○クラスの子どもの入園時

二十人が四才に入園した子ども（即ち始めから受け持った子）、あ

との十七人は三年保育から上ってきた子どもで、そのうち八人は他のクラスから、九人は私の持ち上がりです。四才で入園した子、私の持ち上がりの子は扱いよいのですが、他のクラスから来た子が一番やりにくく、主として「子どもの家」など私の目を避けて遊ぶ子どもは、この子どもたちです。

○入園当初苦労したこと

どうしたら子どものありのままの姿を、幼稚園において出させることができるかに苦労します。そのために一カ月も二カ月もかけます。子どもがあのままの姿を示さなければ、子どもの個性もつかめませんし「教育」は始まりません。それで「先生の存在」をあまり強く感じないように注意します。時々「おかあさん」なんて呼ばれる時には、ひよっとしたらあわてて間違えたのでしょうが、「ああ、家庭を幼稚園と取り違えるほど気楽に感じているのだな」などと思つてうれしくなります。

入園当初に基本的な生活習慣としてさせることは、食事前、砂あそびなどよごれた時の手洗いのように、どうしてもしないと病気になるとか、どうしても守らないと危険だとか、上ばきと下ばきをかえるなど最少限のことにとどめます。

今も、私共の願いは

元園長倉橋惣三氏の「育ての心」にあるように「子どもと共に喜び、子どもと共に悲しむ」先生でありたいということです。

*

*

*

*

*

*

ある病院小児科にて (二)

堀 越 清



前回では東大分院小児科でのカンファレンスがどんな働きをしていたのか、またそれを中心として各専門家即ち医師、ナース、ソーシャル・ワーカーがどのように動いているかなどについてお話しいたしました。ひとりひとりの患児についてそれぞれの専門分野での知見を持ち寄り、そこで生じた問題を解決しようというわけです。……そこへ心理学の分野から私が加わったのですが、私はどう動いたらよいのでしょうか、前述の人々の活動でこちらが動く余地は決して無いように見えますが、そこは餅は餅屋といましようか、それなりにやるべき事が出てきます。よく世間では心理学と言えぱすぐ知能テストとか性格テストと言ったテストのことを思い浮べますが、ご多聞に洩れずここでもテストが必要な場合があります、その時は私がテスト要員となるわけです。特に幼ない子どもが入院した場合、しばしばその病気とは別に心身の発育の遅れが目立つ子どもがいます。前回に述べた「小頭症」の子どもなどはもうテスト以前段階でテストにのりようがありませんからどうする事もできませんが、それは例外として、その他に、カンファレンスで「あの子

はどうも発達が遅れているのでは……」と問題になる子どもが出てきますと、先ず入院の際にとった生育歴を調べるのですが、いわゆる「話し始め」とか「歩き始め」が一寸半以後になって現われる事がこうした子どもにはよくあります。(もっともお誕生頃に現われるのが普通とされていますがその頃重い病気にかかるとうしても発現はおそくなります。それとか脳神経系の病気例えば脳性小児マヒとか日本脳炎にかかって発現が遅れていく子どもを除きます)そういう時そのままにしておく、こういう子どもは小学校入学になって漸く「遅れている」ことが分ってから慌てて対策をたてた事になりがちです。それでは何かとまずい事が多い。できれば早い中に「発育の遅れ」を客観的な手段で調べて親にその現実を認めさせ、た方がよいのではなからうか、いわば「精神薄弱児の早期発見及び対策」という見地から知能テストの必要が生じることになります。しかしそう言う言ってもこれは「遅れ」が或る程度外見でも認められるような時に限ります。たいていはその子が「普通児かどうか」はテストをしなくても分りますし、したがってテストするのは余程

の場合なのです。ですから、その疑いがないのにたとえ親がテストを希望したとしても、もちろんテストはいたしません。それでもテストを望む親には「話し合い」で解決するようにしています。そこで私がテストをする事は極めて少ないことになります。いわば精薄児の識別の必要に迫られた時だけです。ではその他には、何か気になるような心理的症状を示す子どもが出たらどうするかといいますと、何かテストをやって時間を使うよりは遊戯療法をやったり、神経科の医局に紹介すればいいので、今のところ他のテストもやっではおりません。もっとも研究の為なら行ないますが、それは将来はともかく、現在いる子どもに直接どうこうというわけではないので、それは別の事柄になります。……テスト以外の事で私がやるものは幾つかありますが、その中の一つは、親がその子どもの病気に関することとは別な事で医師やナースに訴えてくる、例えば、「家の子はどうも落ち着きがない」とか「学業が振わない」とか「仲間とうまく遊べない」などはよくあります。そういう時、医師、ナースはそれぞれの仕事で手一杯でそれでもいちおうそうした訴えに耳は傾けますが、到底とことんまではきいてはやれない、そこでそうした事はむしろこちらの「畠」ですから私が話し相手になるのです。たいていの場合はこうした話し合いで子どもが退院するまでには収まるのですが、それでも後をひきそうな人には、私一人では手が廻りかねますので学内の教育相談室へ紹介することになっています。もっとも相談室の方も受入れに限りがありますので、できるだけここで解決しようとしています。先だってこういう事がありました。それは、子どもの病気が何か家庭の事情から生じて、入院

させれば治るのだけれども、退院して家庭に戻るとまた再発のおそれがあるような病気ですが、これは下手をすると入院、退院、また入院といった悪循環を何度も繰り返す可能性があります。そこでどこかでその悪循環のくさを断ち切らねばならないことになりました。もう少し具体的にお話し致しますと「拒食症」と呼ばれる病気がどうもこれにあたるようです。これはものを余り食べなくなる事から始まり、遂には全然食物を受けつけなくなるような症状になります。原因は子どもによっていろいろあり、いち概には断定できませんが、多くは家庭の事情に起因しているのではないかと思います。先日、こうした症状の五才の男の子が入院してきました。何でもまる二日位全然何も口に入れてないので親が驚いて入院させたとのことでした。そうして附添って来た母親は、わが子可愛さか或いはそれまで余り子どもと離れた経験がなかったのかはともかく、片時もこの子の側を離れず何かと世話をやこうとしている。他方当の子どもの方は始めは温和しくベッドに寝ていたが、同じような年頃の子ども達が病室から出たり入ったりして（いずれも入院児ですが）仲間を作って楽しそうに遊んでいるのが彼の目に入ってくる。とそこは小さい子どものこと、二日も食べてない事なんか忘れてベッドを下り、連中の遊びをのぞきに行こうとしている。傍にいる母親は慌てて「じっとして寝ていらっしゃい」とたしなめているが彼は不服の態である。しかしこの子は何も食べてないという事以外には健康に異常はないので、病院側は別に彼に安静を強いているわけではなく好きなようにさせている……、そこで彼をたしなめている母親が「子どもの事は病院に委せるように」とナースに注意をさ

れた。更に面会時間以外は親は子どもを病室に置いて帰宅するよう
にと言われた。ところが親としては離れたくないし、子どもの方
も「お母さん僕を置いて帰っちゃうんじゃないか」と同じような不
安な気持ちでいるので双方何となく別れたくはない。困った母親は、
子どもが寝入ってからそうと気がつかれないように病室を抜け出
ようとそれでも別れる決心をしてチャンス waited のですが、どっ
こい彼の方はなかなか寝てはくれない。ようようの事で彼が眠りに
入ったらしいのでこっそり出ようとした途端に眼をあいた子どもが
「お母ちゃんどこへ行くの」とやって母親はがっくり、せつかくの
決心も出鼻を挫かれて始めの状態に逆戻りの始末。……こうした
光景が二、三度繰り返されるのをみた主任のナースが「お母さん、
子どもに黙ってこっそり帰るといのはいけない、起きている時
に、次は何日何時頃来るとちゃんとお約束をしてそうして別れて下
さい、後でお子さんが少し泣いても子どもはすぐなれますから……
」とすすめた。納得した母親はまだかなり不安ではあったが、思
い切って言われたように彼とはっきりお約束して後は逃げるよう
に別れた。

子どもはその当座はちょっと泣きそうだったが、小一時間もする
とそれも収まり、先刻の子ども達がにぎやかに遊んでいる音を耳に
するとベットから下りてその方へのぞきに行った。やがて仲間に加
わるようになった。その後食事の時間（夕食）になりましたが、お
もしろい事にその前の食事時には母親が傍で何とか口に入れさせ
ようと努めたにもかかわらず全然箸もつけなかったこの子どもが、
少しではあるが口へ入れるようになりだした。それが日一日とたつ

につれて次第にものを食べるようになり、家庭では偏食が激しくて
困ると言われていたのにしまいいは何でも食べる、一週間後には小
児科入院児の中で一番喰べる子どもになった……もうそうなれば治
ったも同然です。

……他方、母親も最初の一日二日は何となく不安で家にいても気
にかかっていたらしいが、ナースの言った通り、子どもの状態が目
に見えてよくなるので感ずるところがいろいろとあつたらしい。も
ちろん始めの不安などは三日位で解消し、今度はよくなっていく子
どもの現実からそれまでの自分の「在り方」を反省するようになって
きた。結局この子は後一〇日の入院ですっかりよくなって退院の
運びになったのですが「果してこのまま家へ帰してどうか」という
事がカンフ・フランスの問題となりました。即ち拒食症はここでは治
ったが、原因がはっきりしない、しかしどうも家庭状況にその一因
があることは推測できる、とすると彼をそうした家庭から離してこ
こへ入れた事とか、母親の接触時間を少なくした事とか、遊び仲間
がここにいた事などが何か治療に役立ったものと考えられる。そう
した効果と言うか、彼の経験なるものが、家庭へ帰って果してどの
位きいているだろうか、どうもぶり返しそうだ、一度母親と誰かが
その事で話し合ってみる必要があらう……というわけで私が三回程
お会いしました。細かいいきさつは省きますが、母親の次のような
ことばだけを紹介しておきます。すなわち、「入院させた当時、そ
れまでこの子と離れたことはなかったし、何かそのまま置いてはい
けない気持もあった、ナースに言われてあの子とお約束をして別れ
たが、それをするのに私としては相当な勇気を必要とした。何か高

いところから飛び下りるような、それこそ目をつぶる思いでやったのだが、今からみればそれがよかったと言うか、とにかくいい経験になったと思っている。しかもあの子は病室でお友達もできたり、食も進むようになった。何だかこうなってみれば何でもないようでもあるが、何かが欠けていたようにも思う。考えてみれば家の中では、私はしゅうととやり合うことで精一杯だったが、この子を余りかまけてやらなかったのだし、あの子にしても姑と何かと言えざらざらこぎを起した事もあるし、そうかと言って家の外に出て近所に遊び仲間らしい子どももなかった事が、何かこの子の気持に充されなないものがあって、うずうずしたものが先日のような病気になるたのではないかと思う。今までも程度の軽いものではあったがあれと似たような事があったのに、ついそのままにしておいたことがあんな事になったのかもしれない。もう少しあの子の身になってやらねば……。これはここ二、三日考えていたのだが、先ずあの子に遊び相手をつつけてやるのが大切だと思い、近所にはそれがいいから、どこか幼稚園か保育園に弟といっしょに入れてみようと考えている。それがどうなるかは分らないけれど、この間の経験もある事だし、やってみなければ分らないのだから先ずやってみて、その時に何か起つたらその時はその時で、と言うつもりです」という意味の事を言われ、私から別れてこの母親はすぐに実行にかかったらしい。三度目に会いました時には「今日或る保育園に入れる手続きをしてきた。今頃では幼稚園は満員だし保育園でもいいと思ってる。あれからあの子はまたまた食事が進まなくなり、ぶり返すのではないかとひやひやしたが、その後は徐々ではあるがまた食べ出し

てきているので、これからは、いろいろとあの子の身になってやれりうまくいくのではないかと思う。もしだめの時はまたお願いにあげりますから……」と述べて別れましたが、爾後は何とかうまくいっているようです。

これは子どもの入院を通じて母親自身の努力と経験が、後の問題解決に役立った例になるのかもしれないが、それを当事者の口から伺うことができたのは私にとってもまたとない経験でした。……その他入院時に母親が子どもの夜尿を訴えたのに入院中一度も夜尿を起さなかった例とか、退院後家庭で母親がルーズな事をして逆に子どもから「お母ちゃん病院ではこうだったよ」とたしなめられて親がハッとした話とかは、病院を幼稚園という場所に置きかえれば案外似たような事があるのかもしれない。……話しはちょっと脱線しますが、いわゆる「長期入院児」で幼稚園や小学校に籍のある子どもはどうしてもその間は長期欠席になるわけですが、担任の先生がその子どもを見舞ったという話を余り耳にしないのが私にはちょっと気懸りです。……先頃、小児ヒステリーの病名を持った子どもで、家庭の経済事情の為中途退院してしまったケースがありました。が、医局ではそのまま放っておく気にもなれないので早速ソシアル・ワーカーに頼んでその後の実情を調査してもらいました。どうもその子は学校にも行かず家の中に留守番（母一人子一人の家庭です）ともつかずただぶらぶらしているらしい。ソシアル・ワーカーはその学校にも行って前担任や現担任といろいろ話し合ったようですが、当の学校側ではそれまではこの子について殆んど手を打っていないらしいのは、ちょっと驚きました。これなどは極

く例外かもしれませんが、一般にはどうなのでしょう。どなたかこれに對してお答えをいただければ……と思っています。

——話が戻りますけれど、私もこの医局の中で先程述べました事の他にいろいろとやっていますが、すべてがうまくいっているわけでは無論なく、中には手痛い失敗をやらしたこともあります。とりわけ、私たちの気持が子どもの家族に誤解されたり、分ってもらえない時はやり切れない気持になります。一度などは、子どもの入院をしゅうと達が反対し、母親がそれを押し切って入院させたまではよかったが、その母が私にいろいろと苦勞話をきかせる。就中、母親が病院に見舞いに時間をさいてくるのがしゅうと達への気兼ねから容易でないし、子どもの病氣について何の協力も理解もしてくれない……、などとしゅうとへの不満を私にぶちまけた時についてこちらがそれに同調して、結果的にはその母親のしゅうとへの敵意に拍車をかけてしまった。そこで家庭でひと悶着を起してすっかり頭に來た祖父母が、「そんなところに可愛い孫を一刻もおけない」とばかりに早朝車で乗りつけて強引に「退院」させてしまった。私が医局へやってきた時にはすべてが終わった後だった、もういくらくやんでも追いつきません。しかもこれと似た問題はこれからもありそうですし、私の陥りやすい「ワナ」でもありますので、痛いけれど大切な経験だと思っています……。

まあこのように今のところはケース・バイ・ケースで私なりに振っています。が、今後はこうした心理学的な側面の仕事をもう少し系統的にしてもカンファレンスを基盤にして進めようという機運が医局の中から起ってまいりました。その中でも有力なのは、入院前後

を通じての子どもの心理的側面の変化から、逆に完全看護の効果というものを確かめていこう、更にそれと親子関係との関連も一定の調査方法を用いて考察していきたい（前述の拒食児のケースなどがこれに当たります）という考えです。

アメリカあたりではこの事はかなり制度化して行なわれているようですが我が国ではむしろこれからの事と思います。と言っても何も今までとちがう特別な事をやるというわけではない、ただ、今まで医師やナースがそれぞれその人の経験でやってきた事をもっと明確な形で記録の上にせられるようにすれば、長い目で見ていろいろと役に立つ事がふえてこようし、単に個々の問題及び処理という見方で埋没させるよりは、それによって一同の集團思考も高まるのではないか、いずれにしても結果的に利するところが多々あらう……；と言った気持がそうした動きになつてゐるのだと思います。

以上思いつくままに分院小児科での現状の一端を書いてみましたが、こうした事は幼児教育の現実をふまえて活動しておられる人からみれば或いはたいした事ではないかもしれませんが、始終直面される事でもありましようが、立場や専門は違つても、子どもを扱う医者やナースの態度とか活動を見ますと、そうした人々と案外同じ基盤に立っているか乃至はその方向に近づきつつあるらしい、という事をこの端々から汲み取っていただければ、将来何かと有意義なものにならう、と思つてあえて記しました。ここから、何か疑問とか意見を伺えればありがたいと思います。

× × ×

× × ×

× × ×

尚絅女学院短期大学卒業生

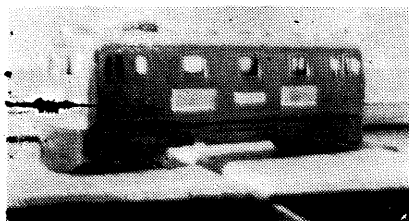
(1) 被験児
仙台市内という生活環境で育ち、

— 52 —

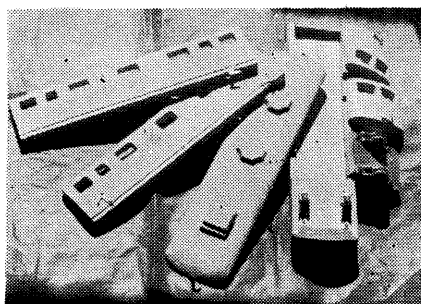
本テストに使用した玩具

(A)既製のもの

鉄製で色彩がほどこ
れ音を発する

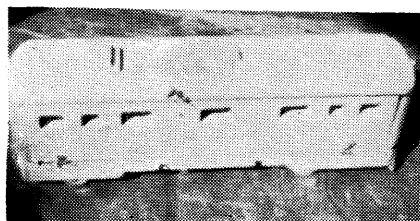


③素材 (木製で色彩はほどこされてない)



↑ 分解された状態

組立てられたもの ↓



調査時期

(一九六〇年11月上旬)

後藤 恭子
白石寿美子

伊藤 紀子
七尾ミオ

研究指導者
調査参加者

伊木 愛子
具田富貴子
鎌田 栄子
佐藤 整子
加藤 常吉

テスト時間	平均時間	既製のみのみ	素材のみ	両方に
46分間	37%	76%	21%	3%

(4) 調査の結果 下の表の通り。
下の表で明らかなように、Eを除いては幼児の玩具にはたらく興味は素材のものに対して絶対的である。Eの既製のものにむけられた関心には、この子どもが最年少であること、他の子どもにくらべて玩具をあまりもち合せておらないことなどが考えられよう。

結 尾

(2) 幼稚園や保育所に通っていない子ども。
(3) 年令は4才から6才の者。ここでは5名を上げ、これらをA B C D Eと呼ぶことにする。
(4) 子どもは無作為(ランダム式)で選んだ。

A									
1. 性別・年令	男 5年3カ月								
2. 玩具を基とした生活環境	多くの玩具に接している								
3. テスト時の身体的条件(その他)	風邪のため発熱し元気がない。午後のため疲労が出てきた様子								
4. テスト時の心理的条件(疲労, その他)	おちついてた								
5. テスト時の場所(他の刺激如何)	子どもの家。他の子どもが外で騒しく遊んでおり、やや気持が散りきり。検査には不適当な条件								
6. 検査者が臨んだその導き方と子どもの応じ方	好きな方で遊ぶように誘導すると「あ!組立てだっちゃ」と云って既製より素材の方に興味を持ち、組立時間全体の96%を素材のもので遊ぶ								
7. 玩具に対する子どもの興味の起り方	はじめ素材・既製両方に手をつけたが素材の方に興味をもち解体した。すぐ組立て始め約6分間で9分通組立てたが一つだけホックがかからず放棄しようとしたので手伝って遊びを持続させた。二つの玩具を並べて相違点をあげ評価をした。好きなのは既製のもの、おもしろいのは素材の方、と云った。自分の玩具も入れついで遊んでいたが、最後に素材に既製のものをぶつけ解体して遊びをやめた								
8. 興味の持続状態	<table border="1"> <tr> <td>全体時間</td><td>26分間</td></tr> <tr> <td>既製のみのみ</td><td>0%</td></tr> <tr> <td>素材のみ</td><td>96%</td></tr> <tr> <td>両方に</td><td>4%</td></tr> </table>	全体時間	26分間	既製のみのみ	0%	素材のみ	96%	両方に	4%
全体時間	26分間								
既製のみのみ	0%								
素材のみ	96%								
両方に	4%								

精薄児の幼児教育

(一)



青木祥子
足立寿美

精薄児の幼児教育ということが問題となり愛育研究所内に精薄幼児のための家庭指導グループが設けられたのは、昭和三十三年のことです。ここに、家庭指導グループにおけるカリキュラム、教師の子どものとりあつかい方などを紹介し、グループの中で、子どもたち一人ひとりがどのように伸びていくかを報告しましょう。

I 家庭指導グループとは

家庭指導グループでは、三才四才五才の子どもを主として対象としています。保育日は週二回、午前十時半より、午後一時半までです。三才四才といえますと、週二日の先生の指導よりも、むしろ、母親の力が大です。そこでこのグループは、特に家庭との連絡、家庭における子どもの取り扱い方の指導に重点がおかれています。週二日の保育日に、教師は子どもの指導にあたります。と同時に、母親への指導、母親の子どもへの理解を助けることが、重要なことな

のです。

一グループは、大体七名の子どもからなっています。どのような子どもが今までにこのグループに参加したかを下の表に示します。

	(人数)	I・Q平均	C・A平均	M・A平均
Aグループ	七			
Bグループ	七	四八	五・一	二・四
Cグループ	八	四五	四・五	一・六
Dグループ	七	五二・三	四・二	二・三
Eグループ	七	二〇	年齢に巾がある	一・三

最初の段階では多くの場合、母親も子どもといっしょに教室の中に入り、教師の子どものとりあつかい方を見、母親自身も教師の手伝いとして子どもの世話をします。

しだいに子どもたちがおちつき、母親からはなれられる時期がく

ると、母親は当番制で代り交替に教師の助手をつとめます。

次いで、教師と子どもだけの時間が、少しずつ増えて、完全にはなれる頃、この家庭指導グループの終了となり、次のグループに移ります。

母親は、教師の子どもの取り扱いを見ます。また、他の母親の、子どもにとりあつかいを見ます。また、教室の中で、自分の子ども以外の子どもの見、世話をするわけです。また時には、母親と教師ではなし合いの時をもちます。そうした中で母親はどんな時、子どもたちがどのような反応を見せるかを見、聞き、また体験するので、くり返しになりますが、家庭指導グループではこの母親の教室での経験が、次第に家庭での生活にもひろがっていくことが一つの大きなねらいなのです。この教師と母親のもとに、子どもたちののびのびと 各々持っている能力を、それなりに発揮し、明るい素直な性格をきずいていくのがこのグループのねがいでもあります。

II 家庭指導グループの保育内容

精薄児であるから、その保育内容は、普通児のそれとは全く異つたものと考えられる方もあるかもしれませんが、いったい、精薄幼児の保育とはどういうものか。ここに述べるのは、私どもの経験から出てきたもので、まだまだ不十分な点や、必要でない点も含まれております。しかし基本的には、遊びを中心とする保育です。ここに便宜上、領域を『基本的生活習慣』と『遊戯活動』にわけて考えてみた

いと思います。

(1) 基本的生活習慣（生活指導）

これには、学校及び家庭での生活に必要な、習慣、身辺処理のことも基本的な事柄の指導です。普通児の保育内容との差があるとすれば、その差は、おそらく、この基本的生活習慣というものに、われわれが非常なウェイトをかけている点にあると言えます。なぜ、これを重要視するかというと、それが必要だからです。そうして、多くの精薄児が困難を感じることからです。

一年間グループにいた子どもたちですら、朝、友だちや先生に、『お早よう』といえる子は少ないのです。また朝教室に入ったら、カバンをかけてスモックに着換えることになっているのに、30分も戸口のところで立チン坊している子ども、スモックをきても、ボタンのはめられない子ども、手伝ってもらえるのを待つ子どもがほとんどです。グループに入った頃は、母親が、さっさと、子どものカバンをはずし、『ごあいさつしたの』『さあたまを下げて』とあたまをおさえて挨拶をさせ、ボタンをはずし、着換えさせてしまいうのです。子どもといっしょにするのではなく、母親が全部してしまうのです。『うちの子どもは何もできない』ということが常に親の考えとしてあり、家庭にあつてもその子どもは誰かの保護の下におかれてきたのです。子どもに対する『かわいそう』という気持、或いは、動作がのろろしているということのため、やさしいことでも母親が手を出し、多くの場合、過保護に陥っています。子どもたちの生活は、やりたいようにするが、さまなければ、おとなのやり

よい仕方です。生活して行くわけですから。その結果、子どもたちは依頼心、のつよい意欲のない状態におかれます。そうして加うるに、多くの母親は、一人でお手洗いにいけることよりも、一枚のなぐり書きをよこびます。ボタンをはめることができなくても、机にすわって、オルガンに合わせて遊戯ができることを願います。多くの場合教師はこの母親の考え方とぶつかなければなりません。グループの最初の頃、朝教室に入つて来ると、さっさと着換えさせ、お手洗いを抱いてすませ、椅子にこしかけさせて「さあ」というふうにするわらせられた子どもたちを見ると、どこからはじめてものか当惑したものです。

この段階から、基本的生活習慣の指導が始まるわけです。

基本的生活習慣(生活指導)に含まれる内容を細かく述べますと、

①着換え 朝学校来るとスモックに着換える。(上着をぬぐ、スモックの袖を通す。ボタンをはめる。)

②排泄 排尿、排便の自立。(要求を教師に伝える。パンツをおりす。戸をあける。戸をしめる。またぐ。紙でふく。手を洗う。パンツを上げる。)

③清潔 遊んだ後、食事の前に手を洗う。(順番にならぶ。袖口がぬれないように、上にあげる。水道の蛇口をひねる。両手をこすりまた手の甲も洗える。手をきちんとタオルで拭く。) 食事の時、こぼしたものを自分できれいにする。

④挨拶、返事 朝のあいさつ、「おはよう」帰りのあいさつ「きようなら」がちゃんといえる。名前を呼ばれた時、元気よく「ハ

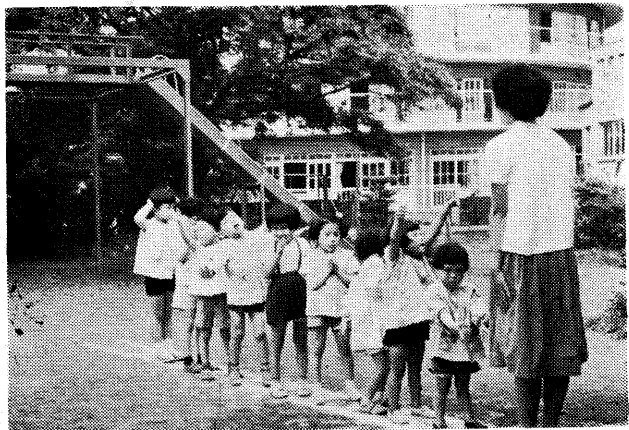
イ」と返事がで
きる。

⑤教室内での規則
を守る カバ

ン、帽子などを
きめられた場所
におく。上靴と
外の靴とを区別
する。遊び道
具、絵本は、す
んだら、きめら
れた場所にもど
す。

この内容の一つ
一つを、約一年か
かって、教師は母
親の助力を得なが
ら行なっていくわけ
です。

さて教室では実際に、どのようにするかを述べましょう。朝お母さんとといっしょにやってくる子どもたちに、先生は元気よく「○○ちゃん、おはよう」と声をかけます。だいたい、初めの頃は何の反応も見られません。これを三カ月、半年、一年と一人も見すごすことのないように注意しながら声をかけていきます。また、子どもが





まわりの友だちに関心を持つよう、〇〇ちゃん、××ちゃんにはようした？”と、子ども同志を結びつけていきます。

また“排泄の習慣”では、最初は時間をきめて、便所に連れていくことから始めます。一人の子どもの傍について、“ハイ、パンツをおろして”“戸をあけて”とやっていくわけですが、中には、こわくって、どうしても便器をまたがない子がいます。また、一人

の子どもを見ている間に他の子どもがもらしてしまったりすることもあります。傍で手伝う母親は、先生のやり方をいつもみている、ついで、抱いてさせてしまうことが多いのです。一人ひとりの子どもの性格を考えながら、細かいところから指導をしていき、次第に、時間をきめないうで、いきたくな

った時にいくようになります。

教師の態度としては、生活指導のさい、いつも一人ひとりの子どもを対象としています。特に着換えなどは、子どもの傍について、細い指示を与えます。そうして、子ども自身が、“ひとりできたよ”ということを経験するように、一人でできないことは助けていきます。そうして、少しずつ、“自分ひとりでできること”を、ひろげていきます。

習慣として子どもの中に入っていくためには、何よりも反復することが大切なようです。そうしてそのやり方はあまり変えたり、省略したりはしないことが大切です。

(2) 遊戯活動

この中には、“社会性”“音楽リズム”“絵画製作”“運動”が含まれています。その内容は次のようなものです。

① 音楽リズム

- ・ 音楽を聞いたりすることを楽しみ、よろこぶようにする。
- ・ リズムに合わせて、簡単な動作ができる。
- ・ 簡単な楽器に興味を示し、使うことができる。

② 絵画製作

- ・ のびのびと書くことを楽しむ。
- ・ 能力に応じて、いろいろな材料になれしむ。
- ・ 注意を集中してあきないでする。
- ・ 教具の後始末がよくできる。
- ・ 友だちといっしょにする。

③運動

・ 基本的な、“歩く”、“走る”、“とぶ”、“投げる”といった運動能力の向上を計ると共に、健康を増進する。

・ 校庭の遊具、運動具を自由に使えるようにし、また体中を使って十分に遊ぶようにする。

・ 集団で活動する。整列できる。

・ リズムや合図に従って運動する。

④社会人

・ 性格の傾向をよくみて、正しく、明るい、素直な態度を養う。

・ 学校や家庭、その他の場に適応して、自由な行動をとる。

・ 日常生活に必要な挨拶ができ、応答する。

・ 積木、砂場、スベリ台の遊びを通じて、独り遊びから、集団あそびへと誘う。

・ 遊びの中で、友だちといっしょに仲良くすることをおぼえる。

・ いろんな経験をし、生活範囲をひろげる。そうして、新しい経験に対しておそれたりしないようにし、独立心をやしなう。

この遊戯活動は、始めの段階では、子どもたちの前に玩具をおいておくかたちになります。グループに参加当時の子どもは非常に遊ぶことが下手です。母親に抱かれてぼんやりしていたし、教室の中に入るのがいやで泣いたりします。そこで、教師対子どもというかたちでなく、母親対子どもという形で遊びに入ります。そうして、次第に 教師対子ども、教師対子どもたち、子ども対子どもという形に移行させていくわけです。それも、子ども自身の動きをみ

て、子ども自身の動きをとらえていきます。

したがって、一日の予定はあらかじめあっても、それは子どもの動きにより変わるわけで、例えば、子どもが絵本をひろげて、“どうさん”をいっしょにみて

おり、“どうさんおはなが長いな”とうたい始めると、それをとらえてリズム遊びに移る ことになります。

教室で使われる道具は、次のようです。

室外遊具……スベリ台、ブランコ、シーソー、自転車、砂場、ボール

ル、プール、ジョロ、水鉄砲

室内遊具……小さい積木、ままごと、まり、各種人形、絵本、乗

物、輪投げ、大積木

体操用具……マット

音 楽……レコード、簡易楽器

教師の合図で、子どもたち全員が遊んだり、いっしょにつくった



りできるまでには、早いグループでも、約六カ月たってからのこと
です。

絵画製作では、子どもが“作る”“かく”ことを楽しむ、“書
きたい”という状態になるまでがたいへんです。たとえ短時間で
も、ある子どもにとっては、机の前にじっとしていることができな
いのです。ある子どもにとっては、クレオンは、それで何か書いて
みるということよりも、折るものである場合もあります。また紙を
クシャクシャにまるめてしまう子、クレオンを巻いてある紙をむく
子、実にさまざまです。

小さい色紙、短いクレオン、かぎられた大きさの画用紙、狭い
机、これらは、最初の段階では、子どもたちの教材としては、あま



りふさわしいものとはいえません。

そこで、①手先きだけの細いものより、むしろ、全身を使えるも
の、②机のまわりに集まることより、もっと広い場所を使う、この
二つの要素を満たす教材を初段階では与えます。

子どもたちが比較的、よろこんで参加したものをあげますと、
フィンガーペインティング……最初は、手の汚れ、スモックに
つくことを、嫌がる子どもいましたが、大きい紙に、手のひ
らを使って書くことに、興味をもち、参加しています。

絵具……太い筆を使わせると、少し手を動かすだけで大きくか
けますので、クレオンでは書くことに興味を示さない子どもで
もよろこぶようです。

落葉工作……公園に散歩にいき、落ちている葉を拾って来て、ノ
リではります。これは、消極的ながら自然観察にもなり、また
落葉を拾うことの楽しみもあります。

運動について。

子どもたちをみますと、その半数のものは、非常に動きが鈍いと
いうことに気づきます。不器用という感じすら受けます。もちろん
中には、一時もじっとしていられず、チョコチョコ動く子どももい
ることがありますが、“自由に動ける”ことは、その子どもの生活
範囲をひろくすること、危険から自分を守ることに必要で
す。また、集団の中の適応のためにも大切です。そこで、教師
は、特にこの点にも力を入れています。

これで比較的成果の上った遊びは、“公園への散歩”です。幸い

近くによい公園があり、そこには、階段やとび石や、坂があり、そのうえ橋もあるので、この運動という点ではとてもよい場所でした。まだグループとしてまとまらない段階では、公園の中で、行方不明になりかけたり、信号をみてわたっている最中とび出してひやりとしたりしました。しかし、つづけてしている中に、フラフラと不安定な歩き方をする子、途中でしゃがみこんでしまつて歩かない子、ちよつとした凸凹にもつまづく子、階段がこわい子、それぞれに体のバランスをとることが上手になってきました。それと共に、庭の高いスベリ台に登って、すべりおりることや、リズムに合わせて、円、直線の上を歩けることも上手になってきます。また、屋外ということが、子どもに解放感を与えるためか、教室ではものをいわない子、声を出さない子が、大きい声を出したり、友だち同志ふざけたりということがあらわれ、教師はそのチャンスをとらえて、グループを次の段階にすすめることができるのです。

Ⅲ 子どもの成長

子どもがどのようにして グループの中に入り、教師との結びつき、友だちへの関心が生まれてくるかをひとりの教師の記録を通して述べてみましょう。

家庭指導グループ経験児童七名、幼稚園生活二年を経験した男子一名、家庭におかれていた女兒一名を加え、全部で九名が、養護学

校幼稚部となる。

生活年令は四月で四才四カ月～六才八カ月と巾広く、

I・Q も三〇～五十九、M・A は一才八カ月～三才であった。保育日は週二日から週四日に増加した。教師と助手一名がついた。新入生女兒は共に学令に達しており、身体も一番大きい。この子は入学当初は、毎朝来ると泣いてい

た。男児Aちゃんは、体格もいいかわり声も大きく、入ってくるなり、イヤーンと泣く。「きあかばんをおきましょう」イヤーン、なんといってもイヤーンで、この状態が四月の二十日まで続く。お手伝いが傍につきつきりであったが、干渉しなかった。皆といっしょに席につかず、皆の席より一m位、離れて立っていた。「つかれるでしょう、すわってらっしゃい」と椅子をすすめてもすわらない





で、イヤーンという。母親は何かおもしろい行事でもあるところこぶのすがと言っていたが、四月二十一日、馬事公苑に遠足にいき、その後二十四日には泣かないで一日をすごした。この日はじめて学校で弁当を食べた。何も声をかけないのに、自分の教室に机を運び込み、さっさと仕度を始めた。皆といっしょの机にすわって弁当を食べ、こいのぼりに色をぬったのが、五月四日、この日、は

じめてスモックも着る。それまで、
「イヤーン」を連続していたし、皆といっしょにすわれるところまでいっていなかったの
で黙っていた。少しきつい口調で、
「きましようね」というと、「イヤーン」をいったように着た。それ以来いわれると着るようになったがだまっていると

三十分でも身仕度しないで立っている。

女兒B子ちゃんも母親、お手伝いの人が、つききりであった。朝来ると入口で泣いていた。（この頃は入口で教師が子どもの来るのを待っていた）大きいクラスの世話好きな子どもがいたので、その子に誘わせて手をつないでもらい教室に入る。Aちゃんのように泣いて動かないということはなく、手伝い人にスモックをきせてもらい、世話好きの子といっしょに外に行く。今まで、父母と本人、手伝い二名という家族構成で、両親が、生存していれば二十三才になる娘を七才で亡くしているのが本人を非常に大切に育てたこと、本人が弱くや々と育ったこと、母親自身も弱く、また神経質であること、今まで家から外に出たことがないという点から、音に対して敏感で、騒々しいのがきらいで、家でもテレビやラジオをかけさせないという状況だったので、初めは朝礼のレコードに泣き、太鼓の音に泣き、ピアノの音に泣き、人が多勢あつまると泣いていた。食欲もなく、この点ではつきそいの人が大騒ぎして ヨダレかけをし、一口ずつ口に運んでやっていた。前のがのみこまれないうちに次のを運ぶのを見ていると思われた。食事がすすまない、どこか具合が悪いのではないかと、母親と手伝いの人が一日中、B子ちゃんのまわりでオロオロしている状態で五月をむかえた。遊ぶのはお手伝いといっしょにあそび、時には、子どもの入室が禁じられている母親の待合い室に連れていこうとさえた。

この状態を黙って見ていたのは、母親に他の子どもの様子を見て

指導に理解をもってもらいたためである。家庭グループに来ていた子どもは、学校でどんな生活をするかしているし、他の子どもともなれているからこわがることはない。しかし、はじめて集団生活を迎える母親は子ども自身よりも大きいショックをうけるようである。教室の中でもこの母親は自分の子ども以外眼中にないような態度で、乱暴な子がB子ちゃんを打ったといっちは「先生大丈夫でしようか」「学校をやすませましょう」という状態であった。

五月に入り、つきそいを断わった。B子ちゃん自身は別に母親を追い求めることもなかったのと他の子どもへの影響を考えてのうえである。

全体の四月のプログラムとしては、「自由遊び」「おあつまり」を中心とした。「おあつまり」も時間はみじかくし、朝おしっこにいった後、机のまわりにすわって、名前を呼ぶ、うたう、遊戯する、時には指人形をつかって話したり、紙芝居を入れた。その後自由遊びに移り、お手洗ひ、食事、自由あそび、帰りの仕度という順で一日の保育を進めた。

自由遊びの時は机をのけ、できるだけ場所を広くし、また、教師は一人ひとりの子どもと手をつないだり、いっしょにフランクにのったり、すべり台をして遊んだ。校内の遊具もできるだけ自由に使えるようにした。時にはすべり台のこわい子どもと教師はいっしょにすべり、自信をつけるようにした。K子ちゃんは、高いすべり台がこわく、すべろうとしなかったが、何回も何回も誘い、その度ににげていたが、足をかけたので、そのうしろから「さあ、のぼって下

さい、先生もすべりたいからね」といつてついていた。先生がすべり、自分もすべらざるを得なくなった。「うしろに先生いるからね、だいじょうぶ」とはげました。しかし体をこわばらしてだめなので抱いてすべった。下についた時、緊張した顔をしていたが「おもしろいねエ」というとニコニコとしてにげていった。その後、むりやりに二、三回いっしょにすべった。五月四日、午前中、はしごを一人で登るが、すべるのがこわいらしい。はしごを逆におりて来ようとするから、こちらが下からのぼり、どうしてもすべらなければならぬような状態にし、「ちっともこわくないね」「おもしろいね」とゆっくりおいつめていく。すべる時には、抱かずにひとりですべり台にしがみついている手をはなし、おしてやる。ねそべったような恰好ですべりおりていく。後からすべっていつて、すぐ、ほめる。そこに見ている子どもたちも、「えらいねエ」と手を打ったり、また他の先生にもほめていただく。弁当の時いつもよりはしゃぎ、いっぱいこぼしてたべる。終わると外にでて、すぐ、すべり台にいく。上までのぼるとしばらく考えているが、なかなかすべれない。他の子がやって来て「発車、オーライ」とすべっていく。傍でマゴマゴしている。「先生が下で待っているからすべってごらん」とはげます。すべっていく子の数がまし、いよいよすべらざるを得なくなり、独りですべる。やはりねそべったままの恰好で来たのをうけとめてやる。それから、その日は20回位、「発車ビー、オーライ」という合図で興奮状態ですべる。時には、はしごから足をふみはずしそうになり、頬を紅潮させていた。私はハラハラして見守っ

た。この出来事をさかいに、この子の日常の生活における状態がかわり、単におとなしい子どもでなく、遊びに熱中し、また、にげだした子をつれてきたり、大きい声をあげて何か言ったり、キヤッキヤッわらったり、名前を呼ばれて返事ができるようにになった。またまわりの子どもへの関心も見られるようになった。

五月には新しく男児Dちゃんが入って来た。普通の幼稚園にいて、園長に、絵の描き方から、普通の子ではないといわれて入ってきた。能力的にはかなりよく、このグループのリーダーになりそうに見えたが、余りにも衝動的な行動が多く、やっとまとまりかけ、落ち着きを見せていた子どもの雰囲気をかきみだした。言語が明瞭で、幼稚なところは全くみられなかった。外貌も普通児と変らず、これで、遅れているのかしらと思えるくらいだったが、このくみの子どもはみんな馬鹿だね”、”あの子はのろまでおかしいね”というのである。自分は活動に参加せず、廻りの子をおしたおしたり、洗面器に水をくんであたまからかけたりする。

このDちゃんに対して、はじめは驚いて見ていたが、小さいJ子ちゃんが度々やられると皆がJ子ちゃんに加勢してぶつようになつた。また、S子ちゃんをおしたおし二人でよくやり合った。六月に入っても母親とはなれず、ちつとでもはなそうとするとかん高い声を出し、その場面に関係のないこと「こわれたおもちゃをくずやにやったね、僕のだから返してよ」などといって泣ききけんだりする状態がつづいて、ついに、”あんな幼稚園はいかないよ”といつて来なくなつた。母親もあまり熱心でなく、家庭訪問してしばらくつづ

けてやってみるようにとすめたが、とうとう退園してしまつた。この間に、子どもは落ち着きを失ひ、子ども同志のけんかが増加した。

J子ちゃんは蒙古症であり、しばしばすわりこんで、何もしないことが多かった。手をつないで遊戯していても一人ぬけてすわりこむこともあった。ことばも少なかった。夏頃になると、新しい靴をはいてうれしそうにしているの、”いいね”とほめると嬉しそうにする。返事もしない。ある日、友だちがよんでいるのに返事しないので、となりの部屋から、”お返事しない!”という、大きい声で、”ハ―イ”と答えた。すぐ、”あら返事が上手なのね”とほめて高く抱きあげた。その日の帰り、また、ために出席をとると返事をしたので、皆でいっしょに、”えらいわね”と賞める。それ以後、大体において返事をするようになった。また、もう一人返事のできなかったK子ちゃんが返事しないと、顔をのぞきこみ、背中をたたいて、返事を促したりして仲良くなった。またゲラゲラとおもしろそうにわらうようになった。ほめられること、認められることは、誰にとつても愉快な経験ではあるが、毎日、何かよいことがあつた時はほめることが必要である。それ以後、新しい弁当袋をもつて来た時は、見せに来たり、積木で何かつくと、よびに来たりするようになった。

日本保育学会第十五回大会 ご案内

会 期 昭和三十七年五月十九日(土) 二十日(日)
会 場 愛 知 文 化 講 堂

〔名古屋市中区栄町テレビ塔前〕
代表電話 名古屋 〇五五二二番

プ ロ グ ラ ム

(1) 個人研究発表

(2) シンポジウム

「幼児の道徳性の芽生えはどうしたらよいか」

連絡先

名古屋市東区大幸町一の一

愛知学芸大学教育研究室内

日本保育学会第十五回大会準備委員会

代表電話 名古屋 〇二五七一番

幼児の教育 第六十一巻 第五号

五月号 © 定価六〇円

昭和三十七年四月二十五日印刷
昭和三十七年五月 一 日発行

東京都文京区大塚町三五
お茶の水女子大学付属幼稚園内

編集兼 発行者 津 守 真

東京都文京区大塚町三五
お茶の水女子大学付属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌ご購入についてのご注文は発売所
所フレーベル館にお願いいたします。

フレーベル館

保育園 御中

(おところ)
(おなまえ)

昭和 年 月 日

なつのおともだち

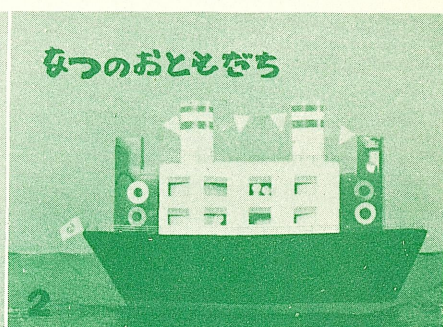
①(年少用)
②(年長用)

冊 冊

申し込みます。

申 込 書

(きりとりせん)



なつのおともだち

夏の幼児の生活指導を中心に、子どもがすすんで興味をもつように全体に楽しさを強調してあります。

その特長は、お話・絵画・工作・ゲーム・テストなど豊富な内容の中に、「遊び」の要素を、創造力や思考力を養う要素と一緒に組み合わせ、つぎからつぎへとだんだん楽しくなるようにしてあることです。

(1) 年少用(生活表つき)・・・50円

(2) 年長用(生活表つき)・・・50円

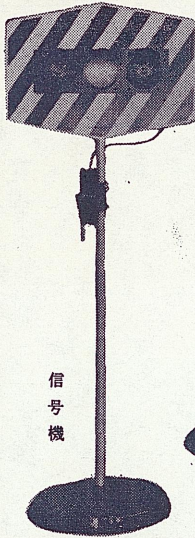
お申し込みは最寄りの弊社代理店・出張所へ…… 発行 フレーベル館

交通安全あそび

信号機（1台）交通標識（標識柱2本、
標識板6種）交通教育指導書（1組）

予価 1セット 18,000円

内 容	
信号機（高さ1.8米）	1 台
* 信号機は実物に近い精巧品で信号の点滅は電気を使わない新方式です。	
交通標識柱（高さ1.2米）	2 本
交通標識板	6 種
横断歩道・安全地帯・歩行者横断禁止・一時止まれ・踏切あり・学校、幼稚園、保育園あり	
* 交通標識柱・標識板ともスチール製で簡単につけ替えができます。	
交通教育指導書	1 組



交通標識柱と標識板

信号機

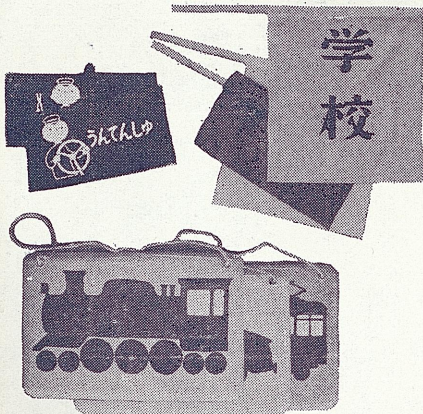
幼児に交通安全教育を!!

交通安全あそび 補助セット

幼児の集団遊びをいっそう楽しく発展させるために揃えた補助セットです。

予価 1セット 2,300円

内 容	
交通車を示す標識	6 種
自動車・トラック・バス・オートバイ・電車・汽車	
緑のおばさんの旗	1 本
緑のおばさんの腕章	1 枚
赤旗と白旗	各 1 本
運転手と車掌の腕章	各 1 枚
交通巡査の腕章	1 枚
呼子（笛）	1 個



お申し込みは最寄りの代理店・出張所へ ▲ フレーベル館

両親のために

—幼稚園の役割と家庭の役割—

山村きよ著

幼稚園の教育とは？ との問いに
かんたんに正しく答えることは、
なかなかむずかしいことです。

しかし、この点をよく理解しても
らい、これに協力、ないしは、積
極的に、園児の両親にとりくんで
もらうことは、たいへんたいせつ
なことです。

それには、本書を、ご活用くださ
ることが、いちばんよい方法でし
ょう。

著者は、保育界の第一人者であり
体裁もA5判・五二頁・八〇円と
いう手ごろなものです。両親にお
すすめください。

フレーベル館

家庭保育12か月

家庭と幼児と幼稚園を結ぶ

大阪府私立幼稚園連盟 編

これは、家庭と幼稚園とを結ぶ、
かけ橋の役目をする書です。

子どもに発達段階を無視した要求
をしている家庭があるなど、家庭と
園とのくいちがいは、起こりがち
です。これをなくすために、この
書は次の事が組まれています。

まず、各月の指導事項をのせ、こ
れに家庭でメモをする欄を設けて
指導の不一致を防ぎます。さらに、
発達基準表、伝染病の注意などの
細かい注意がのせてあります。そ
して末尾には、連絡票をつけ、意
見、感想を担任の教諭に連絡でき
るようになっています。価格も一
〇〇円で手がりますので、ぜひ、
ご活用ください。

フレーベル館

キンダーブック

6月号予告

“とけい”

別冊

キンダーブック

物語絵本

(季刊)

春の号

“へりこふたーの

ぶんきち”

作・阿 川 弘 之
え・岡 部 冬 彦



別丁ベアレンツコーナーつき

B5判 20頁 50円



わたくしたちの1日の、はじまりからおしまいまで、時計はいつも見ていてくれます。時の記念日にちなんで、子どもたちの生活のけじめに必要な時間の問題を取り上げて編集しました。

A4判 16頁 付録付き
50円

東京都千代田区神田小川町 3-1

フレーベル館

振替口座 東京 19640 番 電話 東京 (291) 7781~5